

聖使徒行實

第一章 一 フエオファイルよ、我第一の書を作りて、凡そイイススの始めて行ひし所、誨へし所を録して、二 其選びたる使徒に、聖神に因りて、命を降して、天に升りし日に迄れり。三 彼は苦を受けし後、多くの確證を以て、彼等の前に己を活くるを視し、四十日の間、彼等に現れて、神の國の事を語り。四 遂に彼等を集めて、之に命じて曰へり、イエルサリムを離れずして、爾等が我に聞きし所の、父の許約せし者を待て。五 蓋イオアンは水を以て洗を授けたり、爾等は日久しからずして、聖神に由りて洗を受けん。六 是に於て彼等集りて、彼に問ひて曰へり、主よ、爾等此の時に於てイスライリの國を興すか。七 彼は之に謂へり、父が己の權内に置きし時及び期は、爾等の知るべき所に非ず、八 然れども聖神の爾等に臨まん時、爾等能力を受けて、イエルサリム、全イウデヤ、サマリヤ、及び地の極に至るまで、我が爲に證者と爲らん。九 此を言ひて後、彼等の目の前を擧れり、雲彼を接けて、彼等に見えざらしめたり。一〇 其升れる時、彼等天を仰ぎたるに、視よ、二人白衣にして彼等の前に立ちて二 曰へり、ガリラヤの人よ、何ぞ天を仰ぎて立てる、爾等より天に升りし此のイイススは、爾等が其天に升るを見し如く、是くの如く又來らん。一二 其時彼等は橄欖山と名づくる山よりイエルサリムに歸れり、此の山は

イエルサリムに近くして、安息日に行く程なり。一三 既に來りて、樓に登れり、彼處に留れる者は、ペトル及びイアコフ、イオアン及びアンドレイ、フィリップ及びフオマ、ワルフオロメイ及びマトフェイ、アルフェイの子イアコフ及びシモンジロト、及びイアコフの兄弟イウダなり。一四 彼等皆心を一にして、婦等とイイススの母マリヤと、彼の兄弟と偕に、祈禱祈願を務めたり。一五 彼の日に於て、ペトルは、門徒（共に集れる者約百二十人）の中に立ちて曰へり、一六 兄弟よ、聖神がダワイドの口を以て、イイススを執へし者の導者と爲りたるイウダを指して、預言せし書は應ふべかりしなり。一七 彼は我等の列に加へられて、此の職の鬮を受けたり。一八 然れども不義の價を以て田を買ひ、身落ちし時、腹裂けて、其腸皆流れたり。一九 此れ凡そイエルサリムに居る者の知る所と爲りて、此の田を彼等の方言に「アケルダマ」即血の田と稱ふるに至れり。二〇 蓋聖詠の書に録せりあり、云く、彼の住所は虚しくなりて、其中に居る者なるべし、又其職位は、他人之を受くべしと。二一 是の故に主イイススの我等の中に入らせし時、二二 即イオアンの洗禮より始め、其我等を離れて升りし日に至るまで、常に我等と偕に在りし者の中、一人我等と同じく其復活の證者と爲るべきなり。二三 是に於て二人即イオシフ、稱してワルサワと云ひ、又イウストと稱へられし者、及びマトファイイを擧げて、二四 祈りて曰へり、主、萬人の心を識

る者よ、爾は此の二人の中、爾が選びたる一人を示して、二五此の奉事及び使徒職の圖を承けしめ給へ、蓋イウダは此の職を離れて、其所に往けり。二六是に於て彼等に圖を與へしに、圖はマトフイイに當れり、彼乃十一の使徒の列に加へられたり。

第二章 一五旬節の日至りて、使徒皆心を一にして共に在り。二忽天より聲ありて、迅しき風の度るが如し、彼等が坐せる所の家に滿てり。三岐れたる舌、火の如き者、彼等に現れて、各人に止れり。四彼等皆聖神に滿てられて、異方の言を言ひ始めたり、神の彼等に言はしめしが如し。五時に敬虔なるイウデヤ人、天下の諸國から來りて、イエルサリムに居る者あり。六此の聲の作りし時、大衆集りて、躁ぎたり、蓋各己の方言を語るを聞けり。七皆駭き且奇みて、互に言へり、視よ、此の語る者は皆ガリレヤ人に非ずや。八如何にして我等は各我が生れし所の方言を聞くか。九我等はバルフイヤ、ミデイヤ、エラムの人、メソポタミヤ、イウデヤ及びカツパドキヤ、ポイント及びアシヤ、一〇フリギヤ及びパムフィリヤ、エギペト、及びキリネヤに近きリワイヤの地方に居る者、ロマより來りし者、イウデヤ人及び進教者、二クリト及びアラワイヤの人たるに、如何にして彼等が我が方言を以て、神の大用を語るを聞くか。二三皆驚き訝りて、互に言へり、是れ何の意ぞ。一三又或者は嘲りて曰へり、

彼等甜き酒に酤になれり。一四ペトル十一と偕に立ちて、聲を揚げて、彼等に謂へり、イウデヤの人及び凡そイエルサリムに居る者よ、此れ爾等の知る所と爲るべし、我が言に耳を傾けよ、一五彼等は、爾等の意ふ如く、酔へるに非ず、蓋今は日の第三時なり、一六此れ即預言者イオイリに因りて言ひし所なり、一七主曰く、末の日に於て、我は我が神を以て凡の肉體に注がん、爾等の子女は預言し、爾等の少き者は異象を見、爾等の老いたる者は夢の兆を見ん。一八彼の日に於て、我は我が神を以て、我が僕及び我が婢に注がん、則彼等は預言せん。一九我奇蹟を上なる天に、休徴を下なる地に施さん、血と火と煙とあらん。二〇日は晦冥に、月は血に變ぜん、此れ主の大にして光榮なる日の未だ來らざる先に在らん。二一凡そ主の名を籲ばん者は、救を得んと。二三イズライリの人よ、此の言を聽け、イイススナヅレイ、即神が彼を以て爾等の中に於て、爾等自らも知れる如く、行ひし異能と奇蹟と休徴とに因りて、神より爾等に證せられし人、二三神の定めたる旨と預知とに因りて解されし者を、爾等取りて、不法の者の手を以て、十字架に釘して殺せり、二四然れども神は死の繯を釋きて、彼を復活せしめたり、死は彼を留むること能はざりしに因る。二五蓋ダワイドは彼を指して曰く、我恒に主を我が前に見たり、蓋彼は我が右に在り、我が動かざらん爲なり。二六此に因りて我が心は喜び、我が舌は樂めり、我が肉體も望

に安んぜん、二七 蓋爾我が靈を地獄に遺さず、爾の聖者に朽つるを見ざらしめん二八 爾我に生命の道を示せり、爾我を爾の顔の前に於て喜に満たしめんと。二九 兄弟よ、我が太祖ダウイドの事を敢て、爾等に言ふべし、彼は死して葬られ、其墓は今日に至るまで我等の中に在り。三〇 然れども彼は預言者にして、神が彼に誓ひて、其裔の中より、肉體に依りて、ハリストスを興して、其位に坐せしめんことを約せしを知りて、三一 先見して、ハリストスの復活を指して、彼の靈は地獄に遺されず、彼の肉體は朽つるを見ざりきと云へり。三二 此のイイススを神は復活せしめたり、我等は皆其證者なり。三三 故に彼は神の右の手にて擧げられて、父より許約せられし聖神を受けて、此の今爾等が見る所、聞く所の者を注げり。三四 蓋ダウイドは天に升らざりき、然れども自ら言ふ、主我が主に謂へり、三五 爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の竟となすに迄れと。三六 然らばイズライリの全家よ、確に知るべし、爾等が十字架に釘せし此のイイススは、神彼を主と爲し、ハリストスと爲ししことを。三七 彼等之を聞きて、心刺さるるが如し、ペトル及び他の使徒に謂へり、兄弟よ、我等何を爲すべきか。三八 ペトル彼等に謂へり、悔改せよ、而して各罪の赦の爲にイイススハリストスの名に因りて、洗を受くべし、然らば聖神の賜を受けん。三九 蓋許約は爾等、及び爾等の諸子、又凡の遠き人、即主我が神が召さんと

する者に屬す。四〇 其他多くの言を以て證して、彼等に勸めて曰へり、此の邪なる世より救はれよと、四一 故に喜びて彼の言を納れし者は洗を受けたり。是の日門徒に加はりし者約三千人なり。四二 彼等は恒に使徒の訓を受け、交際を爲し、餅を擘き、祈禱を行へり。四三 人心皆畏を懷けり、多くの奇蹟と休徴とは、使徒に由りて、イエルサリムに行はれたり。四四 信する者皆相集りて、共に諸物を用ゐたり。四五 産業と所有とを鬻ぎ、各人の需用に従ひて、此を衆に分てり。四六 日日心を一にして殿に在り、家家に餅を擘きて、歡喜と朴直なる心とを以て食を食ひ、四七 神を讚美し、衆民の親愛を獲たり。主は救はるる者を日日教會に加へたり。

第三章 一 第九時の祈禱の時、ペトル及びイオアン共に殿に升れり。二 母の胎よりして跛なる者あり、人日日彼を昇きて、美門と名づくる殿の門の側に置き、殿に入る者に施濟を乞はん爲なり。三 彼はペトル及びイオアンが殿に入らんとするを見て、施濟を乞へり。四 ペトルはイオアンと與に彼に目を注ぎて曰へり、我等を觀よ。五 彼は得る所あらんと意ひて、熟彼等を視たり。六 ペトル曰へり、金銀は我に無し、然れども我に在る者を爾に與ふ、イイススハリストスナゾレイの名に因りて、起ちて歩め。七 乃其右の手を執りて、彼を起したれば、其足と踝と直に健くなれり。八 彼は踊りて立ち、且歩

み、彼等と偕に殿に入りて、歩み且躍り、神を讚美せり。九 民皆彼が歩みて、神を讚美するを見、一〇 其素殿の美門に坐して、施濟を乞ひし者なるを識りて、彼に成りしことを甚 駭き奇めり。一一 愈されたる跛者がペトル及びイオアンを離れざるに因りて、駭ける民は皆彼等に、ソロモンの廊と名づくる所に、趨り就けり。一二 ペトル之を見、民に語りて曰へり、イズライリの人人、何ぞ此を奇とする、抑何ぞ我等に目を注ぐこと、我等が、己の能力 或は敬虔を以て、彼を歩ませし如くする。一三 アウラム、イサク、イアコフの神、我が先祖の神は、其子イイスス、爾等が解しし者ピラトが彼を釋さんと擬せし時、爾等が、其面の前に拒みし者を榮せり。一四 爾等は聖なる者、義なる者を拒み、人を殺しし者を爾等に賜はんことを求めて、一五 生命の宰を殺せり。神は彼は死より復活せしめたり、我等は其證者なり。一六 彼の名を信するに頼りて、其名は爾等が見る所識る所の、此の人を健くせり、彼に因る信は、此の人に、爾等衆の前に、此の全愈を與へたり。一七 兄弟よ、我今知る、爾等は知らざるに由りて、之を行へり、爾等の有司も亦然り。一八 神は、其諸預言者の口を以て、ハリストスの苦を受けんことを預言せし如く、斯く應はせたり。一九 故に爾等悔改轉移して、爾等の諸罪の抹さるるを致せ。二〇 主の顔より安慰の時來らん爲、彼が爾等に預言せられしハリストスイイススを遣さん爲なり。二一 蓋神が古世より、其聖なる

諸預言者の口を以て、言ひしことの悉く振興せられん時に至るまで、天は彼を受くべきなり。二三 モイセイは先祖に謂へり、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、我の若き預言者を爾等に起さん、凡そ彼が爾等に語らんとすることは、彼に聽け。二三 凡そ此の預言者に聽かざる者は、民の中より滅されんと。二四 サムイルより以來、凡そ語りし所の預言者は、亦此の日を預言せり。二五 爾等は諸預言者、及び許約の諸子なり、即 神がアウラムに、爾の裔に由りて地の萬族は祝福せられんと云ひて、爾等の先祖に賜ひし許約なり。二六 神は其子イイススを復活せしめて、先づ 爾等に彼を遣せり、爾等に祝福して、 爾等各人を諸惡より轉せしめんが爲なり。

第四章 一 彼等が民に語れる時、諸司祭と殿の宰とサッドウケイ等と就きて、二 彼等が民を教へ、及びイイススを引きて、死より復活を傳ふるに因りて、熾れり。三 乃 彼等に手を措きて、且に至るまで彼等を守らしめたり、時己に暮れたればなり。四 然れども言を聽きし者の中、多く信ぜり、其數約五千人なり。五 明日、彼等の有司、長老、學士等、六 及び司祭長アンナ、亦カイアフア、イオアン、アレキサンドル、其他司祭長の族人イエルサリムに集り、七 使徒を中に立てて問へり、爾等は何の能、或は何の名を以て、此を行ひしか。八 其時ペトル聖神に満てられて、彼等に謂へり、民の有司及び

イズライリの長老等よ、九若し今日我等、病みたる人に行ひし善事に就きて、其如何に愈されしと訊されば、一〇 則爾等衆及び全イズライリ民は知るべし、イイススハリストスナヅレイ、爾等の十字架に釘せる者、神が死より復活せしめし者の名に由りて、即彼に由りて、此の人健にして爾等の前に立てるなり。一一 彼は乃爾等、工師たる者が、棄てし所の石、屋隅の首石と成りたる者なり、一二 此の外別に救を得しむる者なし。蓋天下には、人に與へられたる他の名の、我等が由りて以て救を得べき者あらず。一三 彼等はペトル及びイオアンの毅然たるを見、其無學にして賤しき者なるを察して、奇めり、又其曾てイイススと偕に在りしを知れり。一四 然れども愈されたる人の之と偕に立てるを見て、駭す可き辭なかりき。一五 乃之に會所の外に出づるを命じて後、相議して曰へり、一六 此の人人に何を爲すべきか、蓋彼等に由りて、著しき奇蹟の行はれしことは、凡そイエルサリムに居る者に顯なり、我等之を無と言ふ能はず。一七 然れども此の事の尚廣く民間に傳はらざらん爲に、彼等を恐喝して、復其名を以て何人にも語らざらんことを戒むべし。一八 乃彼等を召して、更にイイススの名を以て言ふことなく、教ふることなきを命じたり。一九 然れどもペトル及びイオアン彼等に答へて曰へり、神に聴くよりも愈りて、爾等に聴くは、神の前に在りて義なるか、自ら判断せよ。二〇 蓋我等は見し所聞きし所を語らざる

を得ず。二 彼等は之を罰する所以を得ずして、恐喝を加へて、之を釋せり、民の故を以てなり、衆皆行はれし事に由りて神を讚榮したればなり。二二 蓋奇蹟に由りて、愈ゆるを得たる人は四十餘歳なり。二三 使徒釋されて其友に來り、凡そ司祭諸長と長老等との之に言ひし事を告げたり。二四 彼等之を聞きて心を一にし聲を揚げて、神に籲びて曰へり、主宰よ、爾は天地海及び其中に萬物を造りし神なり、二五 爾は聖神を以て、我が祖、爾の僕ダワイドの口に藉りて曰へり、異邦何爲れぞ騒ぎ諸民何爲れぞ徒に謀る、二六 地の諸王興り、諸侯相集りて、主を攻め、其ハリストスを攻むと。二七 蓋誠にイロド及びポンテイイピラトは、異邦人及びイズライリ民と共に、此の城に集りて、爾の聖なる子イイスス、爾に膏つけられし者を攻めたり、二八 爾の手及び爾の旨の預め定めし事を行はん爲なり。二九 主よ、今も彼等の恐喝を鑒みて、爾の諸僕に、毅然として、爾の言を言はしめ、三〇 爾の手を伸べて、爾の聖なる子イイススの名を以て醫を施し、休徵奇蹟を行ひ給へ。三一 彼等の祈禱竟りて後、其集れる處震ひ動き、皆聖神に滿てられて、侃侃として神の言を言へり。三二 信じたる衆民は心を一にして、靈を一にして、一人も其所有を己の物と言はずして、共に諸物を公用せり。三三 使徒は大なる能を以て、主イイススハリストスの復活を證せり、大なる恩寵は彼等衆人に在り。三四 彼等の中に一人も乏しき者なかり

き、蓋凡そ地或は家を有てる者は之を售り、其售りたる價を攜へて、三五 使徒の足下に置き、而して各人に、其需むる所に隨ひて、之を與へられたり。三六 斯くレワイの族にして、キブルに生れしイオシヤ、使徒にワルナワ、譯すれば、勸慰の子と稱へられし者は、三七 田疇有りて、之を售り、其金を攜へて、使徒の足下に置けり。

第五章 一 然れども一人、アナニヤと名づくる者、其妻サブフィラと偕に、産業を售り、二 其妻も與り知りて、價の數分を藏し、數分を攜へて、使徒の足下に置けり。三 ペトル曰へり、アナニヤ、何爲れぞサタナ爾の心に、聖神に偽りて、地の價の數分を藏す意を満てたる。四 爾の有せし所は、爾に屬せしに非ずや、之を售りて得し所は、爾の權に在りしに非ずや、爾何ぞ此の事を心に懷きたる、爾は人に偽りしに非ず、乃神に偽りしなり。五 アナニヤ此の言を聞きて、仆れて氣絶えたり、之を聞きし者大に懼れたり。六 少者等起ちて、之を取り、昇き出して葬れり。七 約三時の後、其妻も、未だ有りし事を知らずして、來れり。八 ペトル彼に問ひて曰へり、我に告げよ、爾等此の價を以て地を售りしか。彼曰へり、然り、此の價なり。九 ペトル彼に謂へり、爾等何爲れぞ共に謀りて、主の神を試みる、視よ、爾の夫を葬りし者の足は門の前に在り、爾をも昇き出さん。一〇 婦立に地に彼の足下に仆れて、氣絶えたり。少者等入

りて、其死したるを見、之を昇き出して、夫の側に葬れり。一一 全教會と凡そ之を聞きし者とは大に懼れたり。一二 使徒の手に由りて、民間に多くの休徴を奇蹟とは行はれたり、衆民心を一にしてソロモンの廊に在り。一三 餘の者は敢て彼等に附かざりき、然れども民は彼等を崇めたり。一四 男女の信する者、増多く主に就き、一五 人病者を衢に昇き出して、床及び榻に置き、ペトルの過ぎて、其影の或は之を蔭はんことを冀ふに至れり。一六 又衆くの人、近傍の諸邑より、病める者及び汚鬼を患ふる者を攜へて、イエルサリムに集れり、皆愈ゆるを得たり。一七 司祭長及び凡そ彼と偕にする者、サツドウケイの異端の徒は、起ちて、嫉に満てられ、一八 其手を使徒に措きて、之を公獄に下せり。一九 然れども主の使夜獄の門を啓き、彼等を引き出して曰へり、二〇 往きて、殿に立ち、此の生命の言を悉くの民に語れ。二一 彼等之を聞きて、早朝殿に入りて教へたり。時に司祭長及び之と偕にする者、來りて、公會及びイズライリの諸子の長老等を召し集め、獄に使用して、使徒を將るに至らんことを命ぜり。二二 下吏往きて、彼等を獄の中に見ざりき、乃反りて、告げて二三 曰へり、我等は獄の固く閉ざされ、守る者の門の前に立てるを見たれども、之を啓けば、内に一人をも見ざりき。二四 司祭長、殿の司、及び他の司祭諸長は、此の言を聞きて、此れ何ならんと異めり。二五 或來りて、彼等に告げて曰へり、視よ、爾等の獄に下

しし者は、殿に立ちて、民を教ふ。二六 其時殿の司は下吏と偕に往きて、彼等を攜へ來れり、然れども強ふることを爲さざりき、民が石を以て撃たんことを懼れし故なり。二七 攜へ來りて、彼等を公會の中に立てたり。司祭長彼等に問ひて曰へり、二八 我等は爾等に、此の名を以て教ふることを、嚴しく禁ぜしに非ずや、然るに視よ、爾等はその教をイエルサリムに滿たし、而して此の人の血を我等に歸せんと欲す。二九 ペトル及び諸使徒對へて曰へり、神に従ふ事、人に従ふより愈るは、宣しきなり。三〇 我が先祖の神は爾等が木に懸けて殺ししイエスを復活せしめたり。三一 神は其右の手を以て、彼を擧げて、主宰と爲し、救主と爲せり、イズライリに悔改と罪の赦とを與へん爲なり。三二 我等は此の事の爲に證を爲す者なり、神が彼に従ふ者に與へし聖神も亦證を爲す。三三 彼等之を聞きて、怒りに勝へずして、使徒を殺さんと謀れり。三四 然れども一のファリセイ人、名はガマリイル、教師にして衆民に尊ばるる者は、公會の中に立ちて、使徒を暫く外に出だすを命じて、三五 彼等に謂へり、イスライリ人よ、爾等此の人人に就きて、何を爲すべきか自ら慎め。三六 蓋はより先、フェウダ起りて、自ら大なりとし、之に附きし者約四百人ありしが、彼は殺され、從ひし者は皆散じて、有るなきに歸せり。三七 其後登藉の時、ガリレヤ人イウダ起りて、多くの民を誘ひて、己に従はしめしが、彼も亡び、彼に従ひし者も皆散じた

り。三八 今も我爾等に語ぐ、此の人人を舍きて、彼等を容せ、蓋此の謀、或は此の所爲、若し人に由らば、自ら毀れん、三九 若し神に由らば、爾等之を毀る能はず、且恐らくは爾等神の敵する者と爲らん。四〇 彼等は之に従へり、乃使徒を召して、之を扑ち、イエスの名を以て言ふことを禁じて、彼等を釋せり。四一 彼等公會の前より出で、主イエスの名に因りて、辱を受くるに堪ふる者と爲りしを喜べり。四二 日日殿に在り、又人の家に在りて、教を宣べ、イエスス ハリストスの福音を傳へて已めざりき。

第六章 一 當日門徒益加はりしに、「エルリニスト」がエウレイ人に對して怨言せしことあり、彼等の嫠が日日の施濟に於て輕んぜられし故なり。二十二の使徒は大數の門徒を招きて曰へり、我等神の言を舍きて、食卓の事を務むるは、宜しからず。三 故に兄弟よ、爾等

の中より、善き證を得、聖神と智慧とに滿てられたる者七人を撰べ、我等之を立てて、此の事を司らしめ、四 我等は専ら祈禱と傳教とを務めん。五 此の言は衆民に悦ばれて、遂に信と聖神とに滿てられたる人、ステファン、又フィリップ、プロホル、ニカノル、ティモン、パルメン、及びアンテオヒヤの進教者ニコライを選びて、六 之を使徒等の前に立て、彼等祈禱して、手を其上に按せたり。七 神の言增長じ、門徒の數甚イエルサリムに増加し、司祭の中にも多

く教に順ひし者あり。八信と能とに満てられたるステファンは、大なる奇蹟休徴を民間に行へり。九時に「リベルティン」と稱ふる會堂、及びキリネヤ、アレキサンドリヤ、キリキヤ、アシヤ人の諸會堂に屬する或人人起ちて、ステファンと辯論せり、一〇然れども智慧と彼が由りて言ひし所の聖神とに敵する能はざりき。一一其時私に人に勸めて、言はしめて曰へり、我等は彼がモイセイ及び神を謗る言を語るを聞けり。一二是に於て民と長老等と學士等とを動かし、突に來りて、彼を執へ、公會に曳き至り、一三誣妄の證者を立てて、言はしめて曰へり、此の人は此の聖なる所及び律法を謗る言を語りて已めず。一四蓋我等は彼の言ふを聞けり、曰く、イイススナゾレイは此の所を毀ち、モイセイが我等に授けし例を易へんと。一五公會中に坐せる者、皆彼に目を注ぎて、其面を見るに、天使の面の如し。

第七章 一時に司祭長曰へり、果して此くの如きか。二彼曰へり、兄弟及び諸父よ、之を聽け、光榮の神は我が祖アウラムに其未だハツランに徒らざる先に、メソポタミヤに現れて、三彼に謂へり、爾等の地を出で、爾の親族及び爾の父の家を離れて、我が爾に示さんとする地に往け。四其時彼はハルデヤの地より出でて、ハツランに居りたり、其父の死せし後、神は彼處より、爾等が今住める、此

の地に徒せり。五然るに此には足を立つるばかりの地の嗣業だに彼に與へざりき、惟彼に、未だ子あらざりし時、此の地を業として、彼及び彼の裔に與へん事を約せり。六神は斯く謂へり、彼の裔は他の地に移住民と爲り、彼處には之を奴隸と爲し、之を苦めて、四百年を歴ん。七神又曰へり、彼等を奴隸とせん民は、我之を審判せん、厥後彼等は出でて、我に此の處に奉事せんと。八又彼に割禮の約を與へたり。其後アウラムはイサクを生み、第八日に於て之に割禮を行へり、イサクはイアコフを生み、イアコフは十二の族祖を生めり。九族祖はイオシフを嫉みて、之をエジプトに賣れり、然れども神は彼と偕に在りて、一〇彼を其悉くの患難より拯ひ、彼にエジプトの王ファラオンの前に恩寵と智慧とを與へたり、王彼を立てて、エジプト及び己の全家の宰と爲せり。一一饑饉と大なる患難とはエジプト并にハナアンの全地に及びて、我が先祖は糧を得ざりき。一二イアコフはエジプトに穀物ありと聞きて、初めて我が先祖を彼に遣せり。一三再遣しし時、イオシフは己を其兄弟に識らしめ、且イオシフの族はファラオンの知る所と爲れり。一四イオシフ遣して、其父イアコフ及び其全族七十五人を迎へたり。一五イアコフエジプトに下りて、己も我が先祖も終れり、一六乃シヘムに攜へられて、アウラムが、銀の價を以て、シヘムのエムモルの諸子より買ひたる墓に藏められたり。一七神が誓ひて、アウラムに許約せし期の近

づくに随ひ、民はエギペトに繁殖して、愈多くなり、一ハイオシフを識らざる他の王のエギペトに起るに迫り。一九彼は悪を我が族に謀りて、我が先祖を苦め、其嬰を棄てて、活かさざらんことを命ぜり。二〇斯の時モイセイ生れて、神の前に美しかりき。三月間其父の家にて育てられたり。二一棄てらるるに及びて、ファラオンの女彼を取り、養ひて己の子と爲せり。二三モイセイは盡くエギペトの學術を教へられて、言と行とに能ありき。二三 彼歳四十に至りて、其兄弟なるイスライリの諸子を顧みんとする心起れり。二四 其中一人の虐げらるるを見て、之を保護し、屈せらるる者の爲に仇を報いて、エギペト人を殺せり。二五 意へらく、其兄弟は、神が彼の手を以て、彼等に救を與ふるを悟るならんと、然れども彼等は悟らざりき。二六 次の日彼等の相闘へるを見て、和を勧めて曰へり、爾等は兄弟なるに、何ぞ互に不義を爲す。二七 然れども其鄰に不義を爲す者は彼を斥けて曰へり、誰か爾を立てて、我等の有司及び裁判官と爲したる。二八 豈爾は昨日エギペト人を殺しし如く、我を殺さんと欲するか。二九 モイセイ此の言に因りて、奔りて、マデアムの地に移住し、彼處に在りて二人の子を生めり。三〇 四十年を越えて後、シナイ山の野に於て、主の使彼に燃ゆる棘の火焰に現れたり。三二 モイセイ見て、異象を奇み、之を審に視ん爲に近づける時、主の聲彼に在りて曰へり、三三 我は爾が列祖の神、アウラムの神、

イサアクの神、イアコフの神なり。モイセイ戦ひ慄きて、敢て視ざりき。三三 主は彼に謂へり、爾の足の屨を解け、蓋爾が立てる處は聖地なり。三四 我はエギペトに在る苦を見、其歎息を聞き、彼は救はん爲に降り、今往け、我爾をエギペトに遣さん。三五 此のモイセイ、彼等が拒みて、誰か爾を立てて、有司及び裁判官と爲したると、云ひし者は、神彼を、棘の中に現れたる天使の手を以て、有司及び救主として遣せり。三六 此の人は彼等を引き出し、奇蹟休徴をエギペトの地に、紅海に、及び野に、四十年間行へり。三七 此のモイセイは、即イスライリの諸子に語つて、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、爾等に我の若き預言者を起さん、彼に聽けと、云ひし者なり。三八 此の人は、即野の會に於て、シナイ山に彼に語りし天使、及び我等の先祖と偕に在りて、我等に授けん爲に活ける言を受けし者なり。三九 我等の先祖は彼に従ふを欲せざりき、乃彼を拒み、己の心をエギペトに轉じて、四〇 アアロンに謂へり、我等に先だちて行くべき諸神を我等の爲に作れ、蓋我等をエギペトの地より引き出しし此のモイセイに、何事のありしかを我等知らざるなり。四一 當日彼等は犢の像を造り、像に祭を獻じ、己が手の作の前に樂めり。四二 是に於て神は面を避けて彼等が天上の軍に事ふるに任せたり、諸預言者の書に録されしが如し、云く、イスライリの家よ、爾等は四十年間野に於て犠牲と祭祀とを我に獻げしか。四三

爾等はモロフの幕、及び爾等の神レムファンの星、卽、爾等が拜せん爲に作りし形を擧げたり、我爾等をワイロンより遠く徒さんと。四四 我等の先祖には、野に於て證詞の幕ありき、モイセイに語りし者が、其見し所の式に遵ひて、之を造らん事を命ぜしが如し。四五 我等の先祖はイイスと偕に之を奉じて、神が我等の先祖の面前より逐ひし異邦民の領地に攜へ入れり。此くの如くにしてダワイドの日に至れり。四六 彼は神の前に恩寵を獲て、イアコフの神の爲に居所を設けんことを願へり。四七 ソロモンは彼の爲に家を建てたり。四八 然れども至上者は手にて造られたる殿に居らず、預言者の云ふ所の如し、四九 主曰く、天は我に寶座、地は私の足の躰なり。爾等我が爲に何の家を建てんか、或は我が安息の爲に何の所あらんか、五〇 我が手皆之を造りしに非ずやと。五一 強項にして、心と耳とに割禮を受けざる者よ、爾等恒に聖神に逆ふ、爾等先祖の若く、爾等も亦是くの若し。五二 爾等の先祖は孰の預言者を窘逐せざりしか、彼等は義者の來るを預言せし者を殺せり、爾等は今此の義者を解し且殺す者と爲れり。五三 爾等は、乃 天使等の捧持に由りて、律法を受けて、之を守らざりし者なり。五四 彼等之を聞きて、其心怒に勝へず、切齒して彼に向へり。五五 時にステファン聖神に満てられ、天を仰ぎて、神の光榮及びイイスが神の右に立てるを見て曰へり、五六 視よ、我天開けて、人の子が神の右に立てるを見る。五七 然れど

も彼等大なる聲を以て叫びて、耳を掩ひ、心を同じくして彼に擁し逼り、五八 城の外に曳き出して、石を以て彼を撃てり。證者等己の衣を一の少年、サウルと名づくる者の足下に置き、五九 石を以てステファンを撃てり、彼祈りて曰へり、主イイスよ、我が靈を接けよ、六〇 乃 膝を屈め、大なる聲を以て呼びて曰へり、主よ、是の罪を彼等に歸する勿れ。此を言ひて寝れり。

第八章 一 サウルは彼の殺されし事を可とせり。當日大なる窘逐はイエルサリムに在る教會に及び、使徒の外は皆イウデヤとサマリヤとの各地に散じたり。二 敬虔なる人ステファンを葬り、之が爲に大なる痛哭を爲せり。三 サウルは教會を殘害し、家家に入り、男女を曳きて、獄に付せり。四 時に散じたる者は偏く往きて、言を福音せり。五 フィリッパはサマリヤの邑に下りて、彼等にハリストスを傳へたり。六 民はフィリッパが行ひし休徴を聞き且見て、心を一にして謹みて其言ふ所を聽けり。七 蓋汚鬼は大なる聲を以て叫びて、之に憑らるる多くの者より出で、亦多くの癱瘋及び跛の者は愈されたり。八 其邑の中に大なる喜ありき。九 爰に一人、シモンと名づくる者あり、素邑に於て魔術を行ひ、サマリヤの民を駭かし、己を大なる者と爲せり。一〇 小より大に至るまで、皆謹みて彼に聽きて、曰へり、此の人は神の大なる能なり。一一 謹みて彼に聽きし

は、素久しく魔術を以て彼等を駭かしし故なり。一二然れども彼等は神の國及びイイススハリストスの名の事を福音するフィリップに信ずるに及びて、男女共に洗を受けたり。二三シモン自も亦信じて、洗を受け、常にフィリップと偕に在りて、行はれたる大なる異能と休徴とを見て駭けり。一四イエルサリムに在る使徒は、サマリヤが神の言を受けたりと聞きて、ペトル及びイオアンを彼等に遣せり。一五二人下りて、彼等が聖神を受けん爲に祈れり。一六蓋聖神は未だ彼等の一人にも降らざりき、彼等は第主イイススの名に因りて洗を受けしのみ。一七其時使徒彼等に手を按せられたれば、彼等聖神を受けたり。一八シモンは、使徒の手の按するに因りて、聖神の授けらるるを見て、之に金を攜へ至りて一九曰へり、我にも此の權を與へよ、我が手を按せんとする者の、聖神を受けん爲なり。二〇然れどもペトル彼に謂へり、爾の銀は爾と偕に亡ぶべし、蓋爾は金を以て神の賜を獲んと意へり。二一爾には此の事に於て分なく鬮なし、蓋爾の心は神の前に正しからず。二三故に此の爾の惡を悔改して、神に禱れ、或は爾が心の念は爾に赦されん。二三蓋我爾が苦き膽に在り、及び不義の繋に在るを見る。二四シモン答へて曰へり、爾等我の爲に主に禱りて、爾等言ひしことの我に及ぶなからしめよ。二五彼等主の言を證し、且宣べて、イエルサリムに返り、途にサマリヤの多くの村に福音を傳へたり。二六主の使フィリップに

告げて曰へり、起ちて南に向ひて、イエルサリムよりガザに下る路に適け、其路は野なり。二七彼起ちて往けり、視よ、エフィオピヤの人、エフィオピヤの女王カンダキヤの寺人にして大臣、其悉くの財寶を司る者は、禮拜の爲にイエルサリムに來りて、二八返り、其車に乗りて、預言者イサイヤを讀めり。二九神フィリップに謂へり、前みて、此の車に就け。三〇フィリップ趨り就きて、彼が預言者イサイヤを讀むを聞きて曰へり、爾讀む所を曉るか。三一彼曰へり、若し我を導く者なくば、我焉ぞ曉るを得ん、乃フィリップに升りて共に坐せんことを請へり。三二其讀める聖書の文は左の如し、彼は羊の如く屠られん爲に牽かれたり、羔が其毛を剪る者の前に在りて聲なきが如く、彼は此くの若く其口を啓かず。三三其卑賤に居る時、彼に於ける裁判は行はれたり。然れども其來歴は孰か能く之を解かん、蓋彼の生命は地より取らると。三四寺人フィリップに謂へり、請ひ問ふ、預言者の此を言ふは、誰を指す、己を指すか、抑他人を指すか。三五フィリップ其口を啓き、此の書より始めて、彼にイイススを福音せり。三六路を行く時、彼等は水の有る所に來れり、寺人曰へり、視よ、水あり、我が洗を受くるに何の礙あるか。三七フィリップ彼に謂へり、爾若し全き心を以て信ぜば、可なり。彼答へて曰へり、我イイススハリストスが神の子たるを信ず。三八乃命じて、車を止めしめ、フィリップと寺人と共に水に下り、フィリップは彼

に洗を授けたり。三九 彼等が水より上りし時、聖神は寺人に降り、主の使フィリップを擧げて去り、寺人復之を見ざりき、乃 喜びて其路を行けり。四〇 フィリップはアゾトに見れ、諸邑を経て、福音を宣べ、ケサリヤに至るに及べり。

第九章 一 サウルは猶主の門徒に向ひて、恐喝と殺氣とを吐き、司祭長に就きて、二 其ダマスクの諸會堂に寄する書を求め得たり、若し斯の道に従ふ者に遇はば、男女を論ぜず、之を縛りて、イエルサリムに曳かん爲なり。三 彼往きて、ダマスクに近づける時 倏 天より光ありて、彼を環り照せり。四 彼等地に仆れて、彼に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を窘逐する。五 彼曰へり、主よ、爾は誰たる。主曰へり、我は爾が窘逐するイエススなり。爾 荊を踏むは難し。六 彼戦き懼れて曰へり、主よ、我が何を爲さんことを欲するか。主彼に謂へり、起ちて、城に入れ、彼處に於て爾が行ふべき事を爾に告げられん。七 彼と偕に往ける人人驚きて立ち、聲を聞きて、誰をも見ざりき。八 サウル地より起きて、目啓きたれども、見る所なかりき。彼等其手を援きて、ダマスクに入れたり。九 彼は三日の間 見ることなく、亦食ひ飲むことなかりき。一〇 ダマスクに一人の門徒、アナニヤと名づくる者あり、主は異象の中に彼に謂へり、アナニヤ、彼曰へり、主よ、我此に在り。一一 主彼に謂へり、起ちて、直

と名づくる街に往き、イウダの家に、タルスの人、名はサウルと云ふ者を訪へ、彼今禱る、一二 而して異象の中に、アナニヤと名づくる人、入りて、見るを得しめん爲に、彼に手を按するを見たり。一三 アナニヤ對へて曰へり、主よ、我多くの者より、此の人の事を聞きしに、彼はイエルサリムに於て、爾の聖徒に害を加へしこと如何ばかりぞ、一四 此に於ても、彼は凡そ爾の名を籲ぶ者を縛らん爲に司祭諸長より得たる權を有てり。一五 然れども主は彼に謂へり、往け、蓋斯の人は我が選びたる器にして、我の名を異邦民と、諸王と、イズライリの諸使徒の前に播かんとする者なり。一六 我は彼に、其我が名の爲に、如何ばかりか 苦を受くべきを示さん。一七 アナニヤ往きて、家に入り、手を彼に按せて曰へり、兄弟サウルよ、爾が來れる途に爾に現れたる主イエスス是我を遣せり、爾が見るを得、且聖神に満てられん爲なり。一八 忽彼の目より鱗の如き者脱けて、彼直に見るを得、乃 起ちて洗を受け、一九 既に食して、力を獲たり。サウル數日門徒偕にダマスクに在り、二〇 直に諸會堂に於て、イエススを擧げて、其神の子たるを宣べたり。二一 聞く者皆駭きて曰へり、此の人は、イエルサリムに於て、斯の名を籲ぶ者を殘害せしに非ずや、且此に來りしも、彼等を縛りて、司祭諸長に曳かん爲に非ずや。二二 然れどもサウル益堅固にして、此は 卽 ハリストスなりと證して、ダマスクに居るイウデヤ人を辯折せり。二三 日を歴ること久しく

して、イウデヤ人彼を殺さんと謀れり。二四此の謀はサウルに知られたり。彼等晝夜邑の門に伺ひて、彼を殺さんとせしに、二五門徒夜彼を取り、筐を以て牆より縫り下せり。二六サウルはイエルサリムに來り、勉めて門徒に交を納れんとしたれども、皆其門徒たるを信ぜずして、彼を懼れたり。二七ワルナワ彼を援きて、使徒に攜へ至り、彼等に其如何に途中に主を見し事、及び主が彼に言ひし事、又如何に彼がダマスクに於て毅然としてイエスの名を傳へし事を述べたり。二八彼はイエルサリムに在りて、彼等と偕に出入し、毅然として主イエスの名に由りて、教を宣べたり。二九又「エルリニスト」と語り、及び辯論せり、彼等は之を殺さんと圖れり。三〇兄弟此の事を知りて、彼をケサリヤに送りて、タルスに遣したり。三一當時全イウデヤ、ガリレヤ、サマリヤの諸教會平安にして成立し、主を畏れて事を行ひ、聖神の慰を得て、數愈増せり。三二ペトル徧く諸方を往きて、リツダに居る聖徒にも詣りしことあり。三三彼處に於て彼は一人、名はエネイ、癱瘋を患ひて八年間床に臥せる者に遇へり。三四ペトル彼に謂へり、エネイよ、イエスハリストス爾を愈す、起きて、爾の床を治めよ、彼直に起きたり。三五リツダ及びサロンに居る者は、皆彼を見て、主に歸せり。三六イオツピヤに一の女徒、名はタウィファ、譯すれば鹿と云ふ者あり、彼は廣く善事を行ひ、施濟を爲せり。三七適其日に病みて死せり。彼を洗ひて、樓

に起きたり。三八リツダはイオツピヤに近きに因り、門徒はペトル彼處に在りと聞きて、二人を彼に遣して、其遅はらずして彼等に來らんことを求めたり。三九ペトル起ちて、之と偕に往けり、至るに及びて、彼を引きて、樓に登らせ、嫠婦皆哭きて、彼の側に立ち、鹿の彼等と偕に在りしに作りたる上衣下衣を示せり。四〇ペトル彼等を悉く外に出し、膝を屈めて禱れり、而して屍に向ひて曰へり、タウィファ起きよ。彼其目を啓き、ペトルを見て坐せり。四一ペトル之に手を授けて、之を起し、聖徒及び嫠婦を召して、之を活ける者として其前に立てたり。四二此の事全イオツピヤの知る所となりて、多くの者主を信ぜり。四三ペトル日久しくイオツピヤに留りて、或皮工シモンの家に居たり。

第十章 ケサリヤに或人、名はコルニリイ、イタリヤ隊と稱ふる隊の百夫長、二敬虔にして、其全家と偕に神を畏れ、民に多くの施濟を爲し、恒に神に禱れる者あり。三日の約第九時に、彼は異象の中に明に神の使を見たり、彼に入りて曰へり、コルニリイよ。四彼はこれに目を注ぎて、懼れて曰へり、主よ、何事ぞ。彼に謂へり、爾の祈禱と爾の施濟とは升りて、神の前に記念せられたり。五今人をイオツピヤに遣して、シモン、稱してペトルと云ふ者を呼べ。六彼は或皮工シモンに寓れり、其家は海濱に在り、彼は爾及び爾の全家

に救を得しむべき言を爾に語らん。七コルニリイに語れる天使の去りし後、彼は其僕二人、及び彼に持する兵卒の一人の敬虔なる者を召して、八 盡く之を告げて、彼等をイオツピヤに遣せり。九明日彼等往きて、城に近づける時、ペトル屋上に升りて禱れり。時約六時なり。一〇飢を覺えて、彼食はんと欲せり。人の之を具ふる時、彼の神象外に遊べり。一一彼は天開けて、一の器の其前に降るを見る、大なる布の如し、四角を繋ぎて、地に縋り下さる、一二其中に凡そ地の四足の牲畜、野獸、昆蟲、及び天空の鳥あり。一三且聲ありて、彼に謂ふ、ペトルよ、起ちて、屠りて食へ。一四然れどもペトル曰へり、主よ、然らず、蓋我未だ曾て穢らはしき物、或は潔からざる物を食はざりき。一五聲再彼に謂ふ、神の潔めたる物は、爾穢らはしと爲す勿れ。一六三次是くの如くして、器復天に上げられたり。一七ペトル見し所の異象は何の意ぞと自ら異める時、視よ、コルニリイより遣されたる人人、シモンの家を尋ね得て、其門の前に立ち、一八呼びて問へり、シモン、稱してペトルと云ふ者は、此に寓れるか。一九ペトル尚異象の事を思ひ居りしに、聖神彼に謂へり、視よ、三人爾を尋ぬ、二〇起ちて下り、毫も疑はずして、彼等と與に往け、蓋我彼等を遣せり、二一ペトルはコルニリイより彼に遣されし人人に下り就きて曰へり、視よ、我爾等が尋ぬる者なり、爾等何の故ありて來りしか。二三彼等曰へり、百夫長コルニリイ、義にし

て神を畏れ、全イウデヤ民に證せらるる者は聖なる天使より、爾を其家に招きて、爾の言を聞かん事の示を受けたり。二三ペトル彼等を延きて館らしめ、明日起ちて、彼等と偕に往き、イオツピヤの兄弟數人も此と偕に往けり。二四次の日彼等ケサリヤに入りたるに、コルニリイは已に其親族と親友とを集めて、彼を候てり、二五ペトルの入る時、コルニリイ彼を迎へて、其の足下に伏して拜せり。二六ペトル彼を起して曰へり、起て、我も人なり。二七乃彼と與に語り入り、多くの集れる者を見て、二八彼等に云へり、イウデヤ人が異邦人と交り、或は近づくことの、法に合はざるは、爾等の知る所なり、然れども神は我に、何人をも穢らはしき者、或は潔からざる者と、云ふ可からざるを示せり。二九故に我招かれて、辭せずして來れり。今問ふ、爾等の我を招きしは、何の爲ぞ。三〇コルネリイ曰へり、四日前に、我齋して此の時に至り、第九時に我が家に禱りしに、忽光れる衣を衣たる人我が前に立ちて三一曰へり、コルニリイよ、爾の祈禱は聞かれ、爾の施濟は神の前に記念せられたり、三二故にイオツピヤに人を遣して、シモン稱してペトルと云ふ者を呼べ、彼は皮工シモンの家に海濱に寓れり、彼來りて、爾に語らんと。三三故に我直に爾に遣せり、爾の來れるは善し。今我等皆神の前に立つ、凡そ神より爾に命ぜられん事を聞かん爲なり。三四ペトル口を啓きて曰へり、今我誠に知れり、神は貌を以て人を取らず、三五 卽凡

の民の中に、彼を畏れて義を行ふ者は、彼に納れらるるを。三六 彼はイスライリの諸子に言を遣して、和平を福音せり、イイススハリストスに因りてなり、是れ萬有の主なり。三七 イオアンの傳へし洗禮の後に、ガリレヤより始まりて、全イウデヤに行はれし事は、爾等之を知る、三八 卽 ナザレトより出でたるイイススは、如何に神より聖神と能力とを以て膏つけられ、徧く行りて善事を行ひ、凡そ惡魔に制せらるる者を醫しし事なり、蓋神は彼と偕に在りき。三九 我等は、其凡そイウデヤの地、及びイエルサリムに行ひし事、又彼等が之を木に懸けて殺しし事を證する者なり。四〇 神は彼を第三日に復活せしめ、彼をして四一 衆民に非ず、爾神が預め選びし證者たる我等、其死より復活せし後、彼と偕に食飲せし者に、現れしめたり。四二 彼は我等に命じて、人人に教を傳へ、又彼が神より定められし生者死者の審判者たるを證せしむ。四三 彼の事に就きて、悉く預言者、凡そ彼を信する者が、其名に因りて罪の赦を得んことを證す。四四 ペトルの尚此を語れる時、聖神は凡そ言を聽く者に降れり。四五 ペトルと偕に來りし割禮を受けたる信者は、聖神の賜の異邦人等にも注がれし事を駭けり。四六 蓋彼等が方言を言ひ、神を讚美するを聞けり。四七 其時ペトル曰へり、我等の如く聖神を受けたる者には、孰か能く水を以て洗を受くるを禁ぜん。四八 乃彼等にイイススハリストスの名に因りて洗を受くるを命ぜり。其後彼等

はペトルに數日間留らんことを請へり。

第十一章 イウデヤに在る使徒及び兄弟は、異邦人等も神の言を受けたりと聞けり。二 ペトルがイエルサリムに上りし時、割禮を受けたる者彼を詰りて三曰へり、爾は割禮を受けざる者の中に入りて、彼等と偕に食へり。四 ペトル始より次第に彼等に述べて曰へり、五 我イオツピヤの邑に祈禱せし時、神象外に遊びて、異象を見たり、一の器、大なる布の如く、四角を縋りて、天より下り、我が前に至れり。六 我目を注ぎて、其中を視るに、地の四足の牲畜、野獸、昆蟲、及び天空の鳥あるを見たり。七 且我に言ふ聲を聞けり、ペトルよ、起ちて、屠りて食へ。八 我曰へり、主よ、然らず、蓋穢らはしき物、或は潔からざる者は、未だ曾て我が口に入らざりき。九 聲 再天より我に答へて曰へり、神の潔めたる者は、爾穢らはしと爲す勿れ。一〇 三次是くの如くして、皆復天に上げられたり。一一 適ヶサリヤより我に遣されし三人、我が在りし家の前に立てり。一二 聖神我に、毫も疑はずして、彼等と偕に往くべき事を言へり。此の六人の兄弟も我と偕に往きて、我等其人の家に入りたり。一三 彼我等に告げて云へり、曾て天使の其家に立ちて、彼に言へるを見たり、曰く、人をイオツピヤに遣して、シモン、稱してペトルと云ふ者を呼べ、一四 彼は爾及び爾の全家に救を得しむべき言を爾に語らんと。一五 我が語り始

めし時、**聖神**彼等に降れり、始めに我等に降りしが如し。二六 其時我主の言ひし言を憶ひ起せり、云く、イオアンは水を以て洗を授けたり、爾等は**聖神**に由りて洗を受けんと。二七 故に若し神は、我等主イイススハリストスを信じたる者に與へし所に等しき賜を、彼等にも與へしならば、我何人ぞ、能く神を阻まん。一八 彼等之を聞きて、對ふる所なく、神を讚榮して曰へり、然らば神は異邦人も悔改を與へて、生命を得しむるなり。一九 ステファンの時に起りし窘逐に因りて散じたる者は、往きて、フィニキヤ、キプル、アンテイオヒヤにまで至りしが、イウデヤ人の外何人にも言を傳へざりき。二〇 然れども彼等の中にキプル及びキリネヤの人人あり、アンテイオヒヤに入りて、主イイススを福音して、エルリン人に傳へたり。二一 主の手彼等と偕に在り、多數の人信じて主に歸せり。二三 此の事の聲聞イエルサリムに在る教會の耳に及びたれば、ワルナワを遣して、アンテイオヒヤに至らしめたり。二三 彼來りて、神の恩寵を見て喜び、且衆人に、心を堅くして、主に従ふことを勧めたり。二四 蓋彼は善人にして、**聖神**と信とに満てられたる者なり。是に於て許多の民は主に就けり。二五 其後ワルナワはタルスに往きて、サウルを尋ね、之に遇ひて、アンテイオヒヤに攜へ至れり。二六 彼等一年間教會に集りて、許多の民を訓へたり。門徒が「ハリステイアニン」と稱せらるること、アンテイオヒヤより生まれり。二七 當日預言者數人イエルサリム

よりアンテイオヒヤに下れり。二八 其一人、アガフと名づくる者、起ちて、**聖神**に藉りて、普天下に大なる饑饉あらんとするを示せり、クラウデイイケサリの時に果たして之ありき。二九 其時門徒各其有てる所に隨ひて、イウデヤに居る兄弟に扶助を餽らんことを定めたり。三〇 遂に之を行ひて、ワルナワ及びサウルの手に託して、長老等に寄せたり。

第十二章 一 其時イロド王手を擧げて、教會の中の數人に害を加へ、二 劍を以てイオアンの兄弟イアコフを殺せり。三 イウデヤ人の之を喜ぶを見て、次ぎて又ペトルを執へたり、時に除酵節の日なり。四 既に執へて彼を獄に下し、班毎に四人の兵卒四班に彼を守るを命じて、逾越節の後に彼を民の前に曳き出さんと欲せり。五 是を以てペトルは獄に守られ、教會は彼の爲に熱切なる祈禱を神に獻じたり。六 イロドが彼を曳き出さんと欲せし時、其夜ペトル二の鐵索に繋がれて、二人の兵卒の間に寝ね、守る者は門の前に在りて、獄を守れり。七 視よ、主の天使前に立ち、光は獄室に輝けり。彼ペトルの脅を衝きて、之を醒まして曰へり、速に起きよ。鐵索は其手より脱ちたり。八 天使彼に謂へり、帶を束ねて、履を著けよ。彼斯く行へり。又彼に謂ふ、爾の袍を身に纏ひて、我に従へ。九 ペトル出でて之に従ひしが、天使の爲す所の眞なるを知らずして、異象を見ると意へり。

一〇 守る者の第一所及び第二所を過ぎて、彼等城に入る所の鐵の門に來りしに、門自ら啓けたり、出でて、一の衢を過ぎたるに、天使忽彼より離れたり。二一 ペトル悟りて曰へり、今我誠に主が、其使を遣して、我をイロドの手、及び凡そイウデヤ民の望める所より、拯ひしを知れり。二二 乃回顧して、イオアン、稱してマルコと謂ふ者の母なりマリヤの家に來れり。彼處には多くの者集りて祈禱せり。二三 ペトル外門を叩く時、乃ロダと名づくる者就きて、之を聴き、一四 ペトルの聲を識りて、喜に因りて、門を啓かず、乃趨り入りて、ペトルが門の前に立てることを告げたり。二五 彼等は之に謂へり、爾狂へるか、女斯くありと言ひ張りたれば、彼等曰へり、是れ即彼の天使なり。二六 ペトル猶叩きて息めず。彼等啓きし時、彼を見て駭けり。一七 ペトル手を揺かして、言ふこと勿らしめて、彼等に主が如何に彼を獄より引き出ししを述べたり、又曰へり、此の事をイアコフ及び兄弟に報ぜよ。遂に出でて、他の處に往けり。一八 旦に及びて、ペトルは如何になりしかと、兵卒の中に騷擾少からざりき。一九 イロド彼を尋ねたれども、獲ざれば、守る者を糺して、之を死に處せんことを命ぜり。厥後イウデヤを離れ、ケサリヤに往きて居りき。二〇 イロド甚しくテイル及びシドンの民を怒りたれば、彼等は心を合せて、之に就き、王の内室の臣ウラストの親を得て、和を乞へり、蓋彼等の地は王の國より糧を得たり。二二

定めたる日に於て、イロドは王の衣を衣、其位に坐し、彼等に向ひて語れり、二三 民呼びて曰へり、此れ神の聲なり人の聲に非ず。二三 忽主の使彼を撃てり、光榮を神に歸せざりし故なり、彼蟲に噬まれて氣絶えたり。時に神の言は増長じて廣まれり。二四 ワルナワ及びサウルは其任務を卒へて、イオアン、稱してマルコと云ふ者を攜へて、イエルサリムよりアンテオヒヤに反れり。

第十三章

一 アンテオヒヤに在る教會に數人の預言者及び教師あり、即ワルナワ、シメオン、稱してニゲルと云ふ者、キリネヤのルキイ、分封の君イロドと偕に養はれしマナイル、及びサウルなり。二 彼等が主に奉事して、禁食する時、聖神曰へり、我が爲にワルナワ及びサウルを別ちて、我が彼等を召して任ぜしむる職を行はしめよ。三 是に於て禁食祈禱し、手を其上に按せて、彼等を往かしめり。四 斯く彼等は聖神に遣されて、セレウキヤに下り、彼處よりキプルに航れり、五 サラミンに在りて、イウデヤの諸會堂に神の言を傳へたり、イオアンは其役者たりき。六 彼等島を経て、パフに至り、一人の魔術者にして、僞預言者なるイウデヤ人、名はワルイイススに遇へり、七 彼は方伯セルギイ・パウエルと云ふ智なる人と偕に在り。方伯はワルナワ及びサウルを召して、神の言を聽かんことを望めり。八 然れどもエリマ（蓋此の名を譯すれば魔術者なり）彼等に敵し

て方伯をして信ぜざらしめんと欲せり。九 サウル又の名はパウエル、
聖神に満てられて、彼に目を注ぎて二〇 日へり、噫凡の詭譎と奸悪
とを盈つる者、悪魔の子、凡の義の敵よ、爾は主の直き道を枉げて已
めざらんか。二一 今視よ、主の手爾に在り、爾瞽と爲りて、暫く日
を見ざらん。 忽其目瞤み暗みて、彼旋りて、相者を尋ねたり。一二
其時方伯行はれし所を見て、主の教を奇として信ぜり。一三 パワ
エル及び之と偕にせし者は、パフより舟行して、パムフィリヤのペルギ
ヤに至り、イオアンは彼等に別れて、イエルサリムに歸れり。一四 彼等
ペルギヤを経て、ピシディアのアンテオヒヤに來り、安息の日に
會堂に入りて坐せり。一五 律法と預言者とを讀みて後、會堂の宰
等使して彼等に謂へり、兄弟よ、若し爾等に民に勸むる言あらば言
へ。一六 パウエル起ちて、手を揺かして曰へり、イスライリの人人及
び神を畏るる者よ、之を聽け。一七 此の民の神は我が先祖を並びて、民
を其エギペトの地に居る時に高うし、又手を擧げて、彼等を彼處より
引き出し、一八 約四十年間彼等を野に養ひ、一九 ハナアンの地に於
て七の民を滅ぼし、其地を分ちて、彼等に嗣がしめたり。二〇 後
約四百五十年間彼等に審官を與へて、預言者サムイルに至れり。
二一 厥後彼等王を求めたれば、神は彼等にキスの子サウル、ウェニア
ミンの支派の人を與へて、四十年を歴たり。二二 既に彼を廢し、ダウ
イドを興して、彼等の王と爲し、且彼の爲に證して曰へり、我はイ

エッセイの子ダウイド、我が心に合ふ人を獲たり、彼は悉く我が旨
を行はんと。二三 此の人の裔より、神は其許約に遵ひて、イスライ
リの爲に救主イエスを興せり。二四 其來らんとする時、イオアン
はイスライリの全民に悔改の洗禮を傳へたり。二五 イオアン其職を
卒ふるに臨みて曰へり、爾等我を誰なりと意ふか、我は彼に非ず、然
れども視よ、我に後れて來る者あり、我其足の履を解くにも堪へずと。
二六 兄弟よ、アウラアムの族の諸子、及び爾等の中に神を畏るる者
よ、此の救の言は爾等に遣されたり。二七 蓋イエルサリムに居
る者、及び其有司等は、彼を識らずして、彼を罪に定めて、安息日毎
に讀む所の預言者の言を應はせ、二八 一も死に當たる故を獲ずし
て、ピラトに彼を殺さんことを求めたり。二九 一切彼を指して録され
し事を卒へて後、彼を木より下して、墓に置けり。三〇 然れども神は彼
を死より復活せしめたり。三一 彼は多日の間、彼と偕にガリレヤよ
りイエルサリムに上りし者に現れたり、彼等は今民の前に彼を證す
る者なり。三二 我等も爾等に福音して云ふ、我が先祖に賜はりし許約
は、神之をイエスを復活せしめしを以て、其子孫なる我等に應は
しめたり。三三 第二の聖詠にも録されしが如し、云く、爾は我の子、
我今日爾を生めりと。三四 又彼を死より復活せしめて、朽壞に歸せ
ざらしめんとする事に至りては、斯く曰へり、我ダウイドに約せし神
聖にして信實なる恵を爾等に與へんと。三五 故に他の章にも云ふ、

爾の聖者に朽つるを見ざらしめんと。三六 蓋ダワイドは其世代中
神の旨に役事して後寝り、其先祖と偕に置かれて、朽つるを見たり。
三七 然れども神の復活せしめし者は、朽つるを見ざりき。三八 故に
兄弟よ、爾等知るべし、彼に由りて罪の赦は爾等に傳へられ、三九
且爾等が、凡そモイセイの律法に由りて義とせらるるを得ざりし事
は、凡の信ずる者彼に由りて義とせらるるなり。四〇 然らば慎みて、
諸預言者の言ひし事の爾等に臨むを免れよ、四一 曰く、藐る者よ、
見て駭き、且亡びよ、蓋我爾等の日に於て一の事を行ふ、人之
を爾等に告ぐ偕、爾等信ぜざらんと。四二 彼等がイウデヤの諸會堂
より出づる時、異邦人は彼等に次の安息日に此等の言を語らんこと
を求めたり。四三 會既に散じて、衆くのイウデヤ人及び敬虔なる進
教者はパウエルとワルナワとに従へり、二使徒彼等に語りて、恒に神
の恩寵に居らんことを勧めたり。四四 次の安息日に、邑の人幾ど
皆神の言を聽かん爲に集まれり。四五 然れどもイウデヤ人は、民を
見て、嫉に満てられ、逆らひ且詬りて、パウエルの言ふ所を拒め
り。四六 其時パウエル及びワルナワ毅然として曰へり、神の言は先
づ爾等に傳へらるべし、然れども爾等之を棄てて、自ら己を永遠
の生命に當たらざる者と爲すに由りて、視よ、我等は轉じて、異邦人
に向ふ。四七 蓋主は是くの如く我等に命ぜり、云く、我爾を立てて、
異邦人の光と爲せり、爾が救と爲りて、地の極に至らん爲なりと。

四八 異邦人之を聞きて喜び、主の言を讚美し、永遠の生命に定めら
れし者は皆信じたり。四九 是に於て主の言は、徧く是の地に廣まれ
り。五〇 然れどもイウデヤ人は敬虔なる貴き婦及び邑の尊者を唆
して、パウエルとワルナワとを窘逐し、之を其境より逐ひ出せり。
五一 二人彼等に對して其足の塵を拂ひ、去りてイコニヤに來れり。五二
時に門徒は喜と聖神とに満てられたり。

第十四章 一 彼等イコニヤに於て共にイウデヤの會堂に入り、教を
宣べて、イウデヤ人及びエルリン人の大衆を信ぜしむるに至れり。
二 然れども信ぜざるイウデヤ人は異邦人の心を動かして、兄弟を惡
ましめたり。三 彼等は日久しく彼處に留り、主に頼りて毅然として
教を傳へ、主は其恩寵の言を證して、彼等の手を以て休徴と奇蹟
とを行へり。四 時に邑の民分れて、或者はイウデヤ人に與し、或者
は使徒に與せり。五 異邦人及びイウデヤ人は、其有司等と與に、彼等
を辱め、石を以て撃たんとして擁し集る時、六 彼等此を知りて、
リカヲニヤの邑リストラデルワイヤ及び其近傍に逃れ、七 彼處に於
て福音を傳へたり。ハリストラに一の足弱き者坐せり、母の胎より
跛にして、未だ曾て歩まざりき。九 彼はパウエルの語るを聽きしが、
パウエル彼に目を注ぎて、其愈さるべき信あるを見て、一〇 大なる聲
を以て曰へり、主イイススハリストスの名に因りて、爾に言ふ、爾

の足にて正しく起て、彼忽躍り起ちて歩めり。一 民はパウエルの行ひし事を見て、聲を揚げて、リカヲニヤの言を以て曰へり、諸神は人の形に藉りて、我等は降れり。二 乃ワルナワを稱してデイイと爲し、パウエルをエルミイと爲せり、彼言に長じたればなり。二三 其邑の前に在るデイイの廟の祭司は、牛を牽き、花冠を攜へて、門に至り、民と偕に彼等に祭を獻げんと欲せり。一四 使徒ワルナワ及びパウエル之を聞きて、己の衣を裂き、躍りて民の中に入り、呼びて曰へり、一五 人人よ、何ぞ此を行ふ、我等も爾等と同情の人なり、今爾等に福音するは、爾等をして此の虚しき者より活ける神に轉せしめん爲なり、即 天地海及び其中の萬物を造りし神、一六 過ぎし世には、諸民に 各其道を行くを容したれども、一七 己を證するを已めずして、諸恩を施し、我等に天より雨を降し、豊作の時を與へ、糧と樂とを以て我等の心を盈たしめし神なり。一八 此を言ひて、漸く民を止め、彼等に祭を獻げずして、各其家に歸らしめたり。彼等此に在りて教を傳へたり。一九 適イウデヤの數人アンテイオヒヤ及びニコニヤより來たり、使徒が毅然として教を宣ふる時、民に彼等を離れんことを勧めて曰へり、彼等が言ふ所は一も實なし、皆誑なり、乃 民を唆して、石を以てパウエルを撃たしめ、其已に死せりと意ひて、邑の外に曳き出せり。二〇 然れども門徒の彼を環りて立てる時、彼起きて、邑に入り、明日ワルナワと偕にデルワイヤ

に往けり。二二 使徒是の邑に福音を傳へて、多くの門徒を獲て、復リストラ、ニコニヤ、アンテイオヒヤに返りて、二三 門徒の靈を堅め、恒に信に居らんことを勧め、且我等が多くの艱難を歴て、神の國に入るべきことを教へたり。二三 又彼等の爲に教會毎に長老を按手し、禁食祈禱して、彼等を其信ぜし所の主に託せり。二四 既にピシデイヤを経て、パムフィリヤに來り、二五 主の言をペルギヤに傳へて、アタリヤに下り、二六 彼處より海に航して、アンテイオヒヤに往けり、即 彼等が、今終へし職を行はん爲に、曾て神の恩寵に託せられし所なり。二七 至るに及び、教會を集めて、凡そ神が彼等を用つて行ひし事、若何にして異邦人の爲に信の門を開きし事を告げたり。二八 後彼等は門徒と偕に彼處に久しく居たり。

第十五章 一 或人人イウデヤより下りて、兄弟に教へて曰へり、若しモイセイの例に依りて割禮を受けずば、救はるるを得ず。二 パウエル及びワルナワが彼等と大に争ひ、且辯論せし時、衆兄弟はパウエルワルナワ及び彼等の中に他の數人が、此の疑問の爲に、イエルサルムに上りて、諸使徒と長老等とに遇はんことを定めたり。三 故に彼等は教會に送られて、フィニキヤ及びサマリヤを經、異邦人の歸正の事を述べて、衆兄弟を大に喜ばしめたり。四 イエルサルムに至るに及びて、彼等は教會、諸使徒、長老等に接けられて、凡そ神が

彼等を用つて行ひし事、若何にして異邦人の爲に信の門を開きし事を告げたり。五時にフアリセイの宗派の信ぜし者數人起ちて曰へり、彼等に割禮を行ひ、モイセイの律法を守るを命ぜし。六 諸使徒及び長老等は此の事を議らん爲に集れり。七 辯論既に久しくして、ペトル起ちて、彼等に謂へり、兄弟よ、爾等此を知る、神は初の日より我等の中に於て我を選べり、異邦人に、我が口より福音の言を聽きて、信ぜしめん爲なり。八 且人の心を識る神は、彼等に證を作して、聖神を與へたり、我等にも與へしが如し、九 又我等と彼等との間にも別を立てずして、信を以て彼等を心を潔めたり。一〇 今爾等は何ぞ神を試みて、我が先祖も我等も負ふ能はざりし軛を、門徒の頸に置かんと欲する。一一 然れども我等は、主イイスス ハリストスの恩寵に頼りて、救を獲んこと、彼等の如くなるを信ず。一二 時に會衆皆默然たり、而してワルナワ及びパウエルが、神の彼等を以て異邦人の中に、若何なる休徴と奇蹟とを行ひし事を述ぶるを聽けり。一三 彼等言ひ竟りし後、イアコフ應へて曰へり、兄弟よ、我に聽け、一四 シモンは已に神が初めて、異邦民を眷みて、其中より己の名を奉ずる民を取りしことを述べたり。一五 諸預言者の言も此と合へり、一六 録して云へるが如し、是の後我轉じて、壞れたるダワイドの幕を起し、其破れたる處を起して、之を立てん、一七 餘の人人及び凡の異邦民我が名を聞くを得る者が、主を尋ねん爲なり、此の諸事を行

ふ主は此を言ふと。一八 神は永世より其一切行ふ所を知るなり。一九 故に我意ふ、異邦人の中より神に歸する者を累はす可からず、二〇 惟書を彼等に遣りて、偶像に汚されたる物と淫行と、勒死したる物と、血とを戒め、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿らしむべし。二一 蓋モイセイの書は、古代より邑毎に之を宣ぶる者あり、安息日毎に諸會堂に讀まるるなり。二二 其時諸使徒及び長老等は、全教會と偕に、己の中より選ばれたる人を、パウエルとワルナワと偕にアンテイオヒヤに遣さんことを定めたり、即イウダ、稱してワルサワと云ふ者、及びシラ、共に兄弟中の長者なる者なり。二三 書を彼等の手に託して曰へり、使徒、長老、兄弟等は、アンテイオヒヤ、シリヤ、キリキヤに居る異邦中の諸兄弟に安を問ふ。二四 蓋我等は、或者が、我等の中より出でて言を以て爾等を擾し、爾等の靈を惑はして、割禮を受け、律法を守るべき事、即我等が彼等に命ぜざりし所を言ふを、聞きしに由りて、二五 我等心を一にして集りて、選ばれたる人を、我等の愛する所のワルナワ及びパウエル、二六 即我が主イイスス ハリストスの名の爲に己の命を致さんと願ふ者と偕に、爾等に遣さんことを定めたり。二七 故に我等はイウダ及びシラを遣せり、彼等又口づから是の事を爾等に述べん。二八 蓋聖神及び我等は、左の肝要なる事の外、何の任をも爾等に負はしめざらん事を定めたり、二九 即偶像に獻げし物と、血と勒死したる物と、淫行

とを戒むる事、是なり、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿れ。爾等之を守らば善し。願はくは爾等平安なれ。三〇是に於て彼等遣されて、アンテイオヒヤに來り、衆人を集めて、書を授けたり。三二衆人之を讀みて、其訓を喜べり。三三イウダ及びシラは、亦預言者たるに因りて、多くの言を以て兄弟を誨へて、之を堅めたり。三三暫く彼處に在りて後、彼等は兄弟より平安にして使徒等に往くを容されたり。三四然れどもシラは彼處に止らんことを定め、イウダは獨イエルサリムに歸れり。三五パウエル及びワルナワはアンテイオヒヤに居り、他の多くの者と偕に教を傳へ、主の言を福音せり。三六日を歴て後、パウエルはワルナワに謂へり、我等復往きて、嘗て主の言を傳へし諸邑に在る我が兄弟の如何を顧みるべし。三七ワルナワはイオアン、稱してマルコと云ふ者を共に攜へんと欲せり。三八然れどもパウエルは、嘗てパムフィリヤに於て彼等に離れて、彼等が遣されし職の爲に往かざりし者を共に攜ふるは、宣しからずと思へり。三九是に於て彼等の間に劇論起りて、相別るるに至れり、ワルナワはマルコを攜へて、キプルに舟行し、四〇パウエルはシラを選びて、兄弟より神の恩寵に託せられて往き、四一シリヤ及びキリネヤを経て、諸教會を堅めたり。

第十六章 一 既にして彼はデルワイヤ及びリストラに至れり。視よ、

彼處に一人の門徒、ティモフェイと名づくる者あり、信じたるイウダヤの婦とエルリン人との子にして、ニリストラ及びイコニヤに在る兄弟に證せられし者なり。三パウエルは彼を攜へて往かんと欲し、其處に居るイウダヤ人の爲の故に、彼に割禮を行へり、蓋皆其父のエルリン人たるを知れり。四諸邑を経る時、彼等はイエルサリムに在る諸使徒及び長老等の定めたる規定を授けて、之を守らしめたり。五是に於て諸教會の信益堅く、其數日に増せり。六フリギヤとガラテイヤの地とを経て、彼等は聖神よりアシヤに言を傳へん事を止められ、セミシヤに來りて、ワイフィニヤに往かんと試みたれども神之を許さざりき。八乃ミシヤを過ぎて、トロアダに下れり。九是に於て夜異象はパウエルに現れたり、一のマケドニヤ人立ちて、彼に求めて曰へり、マケドニヤに涉りて、我等を助けよと。一〇斯の異象の後、我等は主の我等を召して、彼等に福音せしむるを悟りて、速にマケドニヤに往かんと定めたり。一一故にトロアダより舟行して、直にサモフラキヤに至り、次の日ネアポリに往き、一二彼處よりフィリッピに至れり、是はマケドニヤの一分の第一の邑にして、植民地なり。我等は此の邑に數日間留れり。一三安息の日に我等は邑の外に、川の邊なる常に祈禱する所に出で、坐して集れる婦に語りしに、一四一の婦、名はりディヤ、フィアテイラの邑の者にして、紫布の商人、神を敬ふ者は聴けり、主は其心を啓きて、パウ

エルの語る所に嚮はしめたり。一五 彼其家族と共に洗を受けし後、我等に求めて曰へり、爾等も若し我を視て主に忠なりとせば、入りて我が家に居れ、遂に強いて我等を留めたり。一六 一日我等が祈禱の所に適きし時、卜筮の鬼に憑らるる一の婢我等に遇へり、卜筮を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。一七 彼がパウエル及び我等に従ひて、呼びて曰へり、此の人人は至上なる神の諸僕にして、我等に救の道を傳ふる者なり。一八 日久しく之を行ひしに、パウエル遂に之を厭ひ、顧みて鬼に謂へり、我イイススハリストスの名を以て、爾に彼より出づるを命ぜ。鬼忽出でたり。一九 婢の主は其利の望の空しくなりたるを見て、パウエルとシラとを執へて、市に有司等の前に曳けり。二〇 既に上官に曳き來りて曰へり、此の人人はイウデヤ人にして、我等の邑を擾し、二一 我等 로마人に受くべからず行ふべからざる例を傳ふ。二二 民も亦齊しく起ちて、彼等を攻め、上官は彼等の衣を褫ぎ、命じて彼等を杖うたしめたり。二三 多く杖うちて後獄に下し、獄吏に固く彼等を守らんことを命ぜり。二四 獄吏是くの如き命を受けて、彼等を内獄に下し、其足に梏を加へたり。二五 夜半の頃、パウエル及びシラ祈禱して、神を讚榮せり、囚者之を聞けり。二六 俄に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門皆忽啓け、各人の械は解けたり。二七 獄吏醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者逃げたりと意ひ、刀を抜きて自殺せんと欲せり。

二八 然れどもパウエル大なる聲を以て呼びて曰へり、自ら戕ふ勿れ、蓋我等皆此に在り。二九 彼火を求めて、躍り入り、戦きてパウエル及びシラの前に俯伏し、三〇 彼等を外に導き出して曰へり、君よ、我何を爲して、救を得べきか。三一 彼等曰へり、主イイススハリストスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家救を得ん。三二 乃主の言を彼及び凡そ其家に在る者に傳へたり。三三 彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を濯ひ、直に自ら其全家と洗を受けたり。三四 遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具へ、全家と偕に神を信ぜし事を喜べり。三五 明くるに及びて、上官は吏役を遣して曰へり、彼の人人を釋せ。三六 獄吏は此の言をパウエルに告げて曰へり、上官使して、爾等を釋す、故に今出でて、安然として往け。三七 然れどもパウエルは彼等に謂へり、我等 로마人たる者を、罪を定めずして、公に扑ちて、獄に下せり、而して、今私に我等を出すか、可からず、乃 自ら來りて、我等を引き出すべし。三八 吏役此の言を上官に告げれば、上官其 로마人なるを聞きて懼れ、來りて、三九 彼等に謝し、之を引き出して、邑より出づるを請へり。四〇 彼等獄を出でて、リデイヤの家に來り、兄弟を見て、之を誨へて去れり。

第十七章 一 彼等アムファイポリ及びアポロニヤを経て、フェサロニカに來り、此處にイウデヤ人の會堂あり。二 パウエル常の如く彼等

の中に入りて、三たびの安息日に、聖書に本づきて、彼等と辯論して、三ハリストスは苦を受け、死より復活すべく、又我が爾等に傳ふる所のイイスマスは、即ハリストスなりと解きて、之を證せり。四彼等の中の數人信じて、パウエル及びシラに従へり、又敬虔なるエリリン人甚多くあり、貴き婦も少からざりき。五然れども信ぜざるイウデヤ人は妒みて、市の匪類を集めて、群を成し、邑を亂し、イアソンの家に逼りて、彼等を民の前に曳き出さんと欲したれども、六彼等に遇はずして、イアソン及び數兄弟を邑宰に曳きて呼べり、彼の天下を亂しし者は此にも來れり、七イアソン彼等を接けたり、彼等皆ケサリの命に違ひて、他の王イイスマありと言ふ。八乃之を聞く民及び邑宰の心を動かせり。九然れども彼等はイアソン及び其餘の者より保證を取りて、之を釋せり。一〇兄弟直に夜に乗じて、パウエル及びシラをウェリヤに往かしめたり。彼等彼處に來りて、イウデヤの會堂に入れり。一一此の處の人人はフェサロニカに在る者より善良にして、熱切に言を受け、日日聖書に就きて、是れ果して此くの如きかと究めたり。一二故に其中の多くの者は信ぜり又エルリンの貴き婦及び男も少からざりき。一三然れどもフェサロニカのイウデヤ人は神の言の、パウエルに由りて、ウェリヤにも傳へられしを知りて、彼處にも來り、民を動かして、此を擾せり。一四其時兄弟直にパウエルを海の方に適かしめたり、シラ及びティモフェイは尚彼處

に留れり。一五パウエルを送りし者は彼を攜へてアフィニに至り、而して其シラ及びティモフェイに、速に彼に來るべし、との命を受けて返れり。一六パウエルはアフィニに在りて、彼等を待てる時、此の邑に偶像に満ちたるを見て、其心傷みたり。一七故に會堂に於て、イウデヤ人及び敬虔の者と、又毎日市に於て、遇ふ所の者と辯論せり。一八「エピクリアン」及び「ストイク」の理學者數人彼と爭論せり。或者曰へり、此の嘔嘲者は何を言はんと欲するか。他の者曰へり、彼は他邦の鬼神を傳ふる者の如し、蓋パウエルは彼等にイイスマ及び復活を福音せり。一九遂に彼を取り、「アレオパグ」に引き至りて曰へり、爾が語る所の新しき教の何なるを、我等知るを得べきか、二〇蓋爾は奇怪の事を我が耳に入る、故に我等は何事なるかを知らんと欲す。二一蓋凡のアフィニ人及び彼處に居る旅人は、他の務に違あらずして、惟新しき事を言ひ、或は聽くのみ。二二パウエル「アレオパグ」の中に立ちて曰へり、アフィニ人よ、我觀るに、概爾等は甚敬虔なるに似たり。二三蓋我行きて、爾等の禮拜する所を巡り視る時、一の壇にも遇へり、書して、識らざる神に獻ずと曰ふ。斯の爾等が識らずして敬ふ者は、我之を爾等に傳ふ。二四世界及び其中に萬有を造りし神は、天地の主にして、手にて造られたる殿に居らず、二五又需むる所ある者の如くに、人の手にて奉事を要せず、自ら生命と呼吸と萬物とも以て衆に與ふ。二六彼は一

の血より、悉くの人類を造りて、之を地の全面に居らしめ、其預期の時と其住居の界とを定めたり、二七 彼等が神を尋ねん爲なり、或は彼を揣り、彼を得ん。然れども彼は我等各人に遠からざるなり、二八 蓋我等は彼に頼りて生き、且動き、且存す、爾等の詩人も言へるあるが如し、云く、我等は其族なりと。二九 既に我等神の族たらば、神體を以て金、若くは銀、若くは石、人の工と機巧とに由りて琢みたる者に似たりと意ふ可からず。三〇 故に神は蒙昧の時を問はずして、今は悉くの人に、何處に於ても、悔改するを命ず。三一 蓋彼已に日を定め、其立てし所の人を以て、義に由りて全地を審判せん。衆に之を信ずべき證を與へて、彼を死より復活せしめたり。三二 死者の復活の事を聞きて、或者は嘲り、他の者は曰へり、此の事復爾に聽かん。三三 是に於てパウエル彼等の中より出でたり。三四 然れども或者は彼に附きて信ぜり、其中にディオニシイ「アレパギト」及びダマリと名づくる婦あり、又他の者は彼等と偕にせり。

第十八章 一 斯の後、パウエルアフィニを離れて、コリンフに來れり。ニ ポントに生れし一のイウデヤ人、名をアキラ、(クラウデイイ 悉くのイウデヤ人にロマを離るるを命ぜしに因りて、) 近ごろイタリヤより來りし者、及び其妻プリスキラに遇ひて、彼等に就き、三 其業の同じきを以て、彼等と偕に居りて、工を作せり、蓋彼等は幕を製るを業

とせし者なり。四 安息日毎に、彼會堂に於て辯論し、イウデヤ人とエルリン人とを勧めたり。五 シラ及びティモフエイがマケドニヤより來りし時、パウエル心甚切迫して、イウデヤ人にイイススのハリストスたるを證せり。六 然れども彼等敵し、且諍りたれば、パウエル衣を拂ひて、彼等に謂へり、爾等の血は爾等の首に歸せん、我は尤なし、今より異邦民に往く。七 乃 彼處を去りて、神を敬ふ一人、イウストと名づくる者の家に來れり、其家は會堂に隣れり。八 會堂の宰クリスプ、其全家と偕に、主を信じたり、又コリンフ人の中多くの者聞きて信じ及び洗を受けたり、九 主は夜間異象の中にパウエルに謂へり、懼るる勿れ、語りて黙す勿れ、一〇 蓋我爾と偕にし、人爾に害を爲さざらん、我に此の邑に多くの民あればなり。一一 彼は彼處に居ること一年六月にして、彼等に神の言を教へたり。一二 ガルリヤンがアハイヤの方伯たる時、イウデヤ人心を合せて、パウエルを攻め、彼を曳きて、審判座の前に來りて一三 曰へり、彼は人人に律法に違ひて神を敬ふことを勧む。一四 パウエルが口を啓かんとする時、ガルリヤンはイウデヤ人に謂へり、イウデヤ人よ、若し不義或は奸惡の事ならば、我爾等に聽く理あり。一五 然れども若し言語及び名字及び爾等の律法に關する論ならば、爾等自ら之を理めよ、我は斯る事の審官たるを欲せず。一六 乃 彼等を審判座の前より逐へり。一七 衆エルリン人は會堂の宰ソスフェンを執へて、之

を審判座の前に掛てり、ガリリヲンは更に此の事を意と爲さざりき。

一八。パウエル尚居ること日久しくして、兄弟に別を告げて、シリヤに濟れり、プリスキラ及びアキラも彼と偕にせり、ケンフレイに在りて彼髪を剪れり、誓願ありし故なり。一九。エフェスに至りて、二人を彼處に留め、自ら會堂に入りて、イウデヤ人と辯論せり。二〇。彼等は之に久しく偕に居らんことを請ひたれども、肯はずして、二一。彼等に別を告げて曰へり、我は邇づける節筵を必イエルサリムに守るべし、若し神欲せば、復爾等に返らん、乃舟に乗りてエフェスを去れり。(アキラ及びプリスキラはエフェスに留れり。)二三。ケサリヤに着きて、彼イエルサリムに上り、教會に安を問ひて後、アンテイオヒヤに下れり。二三。暫く此處に留りて後、出でて、次を逐ひて、ガラテイア及びフリギヤの地を経て、衆門徒を堅めたり。二四。アレキサンドリヤに生れしイウデヤ人、アポロロスと名づくる人、辯才あり、且聖書に達したる者は、エフェスに來れり。二五。此の人は主の道の端緒を聞き、心熱して主の事を詳に言ひ且誨へたり、然れども惟イオアンの洗禮を知れるのみ。二六。彼會堂に於て毅然として語れり。アキラ及びプリスキラは聞きて後、彼を延きて、尚詳に彼に主の道を解き明せり。二七。彼がアハイヤに往かんと欲せし時、兄弟は門徒に書を送りて、彼を接けんことを勧めたり。彼は彼處に來りて、恩寵に頼りて信ぜし者を多く助けたり。二八。蓋公衆の前に強くイウデヤ

人を論破し、聖書に據りてイエスハリストスたるを辯明せり。

第十九章 一。アポロロスのコリンフに居る時、パウエル土地を経て、エフェスに來り、或門徒等に遇ひて、二。之に謂へり、爾等は信ぜし後聖神を受けしか。彼等曰へり、我等は聖神の有ることだに聞かざりき。三。彼曰へり、然らば爾等何に因りて洗を受けしか。彼等曰へり、イオアンの洗禮に因りてなり。四。パウエル曰へり、イオアンは悔改の洗を授けて、人人に彼に後れて來る者、即ハリストスイイスを信すべきことを言へり。五。彼等之を聞きて、主イエスの名に因りて洗を受けたり。六。パウエルが彼等に手を按するに及びて、聖神彼等に降り、彼等異方の言を言ひ、且預言せり。七。其數約十二人なりき。八。パウエル會堂に入りて、毅然として言ひ、三月間神の國の事を論じ、且勧めたり。九。然れども或人人剛愎にして信ぜず、主の道を民の前に詆りしに因りて、彼は之を離れ、門徒を別けて、日日ティランと云ふ者の學校に辯論せり。一〇。是くの如きこと二年にして、アシヤに居る者、イウデヤ人エルリン人に論なく、皆主イエスの言を聞くに至れり。一一。神はパウエルの手を以て、希有の異能を行ひ、二。其身より手巾或は檐衣を取りて、病者に加ふれば、病退き、惡鬼出づるに至れり。三。イウデヤ人の中の巡りて警戒を爲す或者も、惡鬼に憑らるる者に對して、主イエスの名を用ゐる事と爲れり、

曰く、パウエルが傳ふる所のイイススを以て爾に誓はしむと。一四
或イウデヤの司祭長スケワと云ふ者の七人の子は是を行へり。一五
然れども悪鬼答へて曰へり、我イイススを知り、亦パウエルを識れり、
惟爾等は誰ぞ。一六 乃悪鬼に憑らるる人躍り攻めて、之に勝ち、之
を壓し、彼等裸にして、傷つけられて、其家より逃ぐるに至れり。
一七 是の事エフェスに居る凡てのイウデヤ人及びエルリン人に知ら
れたれば、彼等皆懼を懷き、主イイススの名は崇められたり。一八 信
ぜし者多く來りて、其罪を認め、行ひし事を訴へたり。一九 邪術
を行ひし多くの者は、其書を集めて、衆人の前に焚けり、其價を合
せて、銀五萬なるを知れり。二〇 主の言は盛に長じて、力を獲た
ること此くの如し。二一 此等の事既に成りて、パウエルはマケドニヤ
及びアハイヤを経て、イエルサリムに往かんことを意に定めて曰へ
り、我彼處に往きて後、ロマをも觀るべし。二二 乃彼に事ふる者の中
テイモフエイ及びエラストの二人をマケドニヤに遣して、自ら暫
くアシヤに留れり。二三 其時主の道に對して騒動大に起れり。二四
蓋一の銀工、名はデイミトリイアルテミダの銀の籠を造りて、
工人に少からざる業を得しめし者は、二五 彼等及び他の同業の職
工を集めて曰へり、友よ、我等が此の業に頼りて利を獲るは、爾等
の知る所なり、二六 亦此のパウエルが、人の手にて作れる者は神に非
ずと言ひて、第エフェスのみならず、幾ど全アシヤに於て、多くの民

を勧めて、惑はししことは、爾等が見る所聞く所なり。二七 是れ
唯我等の業の輕んぜられん危あるのみならず、即大なる女神ア
ルテミダの殿も 藐にせられ、アシヤ及び全地の尊む者の威嚴は
滅されん。二八 彼等此を聞きて、烈しく怒りて、呼びて曰へり、大
なる哉エフェス人のアルテミダよ。二九 邑舉りて大に騒ぎ、パウエ
ルの同行者、マケドニヤの人ガイ及びアリストアルフを執へて、心を合
せて劇場に擁し入れり。三〇 パウエル民の中に入らんと欲せしに、
門徒之を許さざりき。三一 又アシヤの上官の中に彼と親しき者等あり
て、人を彼に遣して、自ら劇場に投ぜざらんことを勧めたり。三二
時に或人は此の事を號び、或人は彼の事を號べり、蓋會衆亂れて、
大半は何の爲に集れるかを知らざりき。三三 イウデヤ人の勸に由り
て、民の中よりアレキサンドルは呼び出されたり。アレキサンドル手
を揺かして、民に言はんと欲せしが、三四 其イウデヤ人たるを知りて、
皆聲を同じくして、約二時間呼びて曰へり、大なる哉エフェス人の
アルテミダよ。三五 邑の書記官は民を撫めて曰へり、エフェスの人
よ、何人かエフェスの邑が大なる女神アルテミダ及びディオペトの
奉事者たるを知らざらん。三六 此の事已に駁す能はざれば、爾等靖
になりて、輕率に事を行ふ可からず。三七 爾等は此の人人を曳き來
れり、然れども彼等は未だ曾て殿の物を竊まず、爾等の女神を譴ら
ず。三八 若しデイミトリイ及び彼と偕にする工人、人を訴ふることを

あらば、裁判所あり、方伯あり、互に訴ふ可し。三九若し他の事に就きて求むる所あらば、法に合ふ會に於て之を議定せられん。四〇蓋我等は今日行はれし事に就きて、騒亂の爲に罪せらるる虞あり、此の粉れたる聚を解くべき辭一もなければなり。言ひ畢りて、會を散じたり。

第二十章 一亂の靖まりし後、パウエル門徒を召して、之を教訓し、之に別を告げ出でてマケドニヤに往けり。二其諸地を経て、多くの言を以て信者を教訓して、エルラダに來れり。三居ること三月にして、シリヤに航らんと欲せし時、イウデヤ人彼を害せんと謀りたれば、マケドニヤを過ぎて反らんことを定めたり。四彼を送りてアシヤに至りし者は、ピルの子ワエリヤの人ソシパトル、フェサロニカの人アリスタルフ及びセクンド、デルワイヤの人ガイ、及びティモフェイ、アシヤの人ティヒク及びトロフィムなり。五此の衆は先づ往きて、我等をトロアダに俟てり。六我等は除酵節の後に、フィリッピより舟行し、五日にして彼等はトロアダに至り、七日間其處に留れり。七七日の首の日、門徒が餅を擘く爲に集りし時、パウエル次の日に往かんと欲して、彼等に講談し、言を續けて夜半に至れり。八我等の集れる樓に多くの燈ありき。九パウエルの長く講談する時、一の少年、名はエウティフ、牖の上に坐して、熟睡し、睡に因りて、身傾き

て、三層樓より下に墜ちたり、之を扶くれば、己に死せり。一〇パウエル下りて、其上に伏し、彼を抱きて曰へり、慌つる勿れ、蓋其靈は猶其中に存せり。一一復上りて、餅を擘きて食ひ、語ることに久しくして、夜の明くるに至り、遂に行けり。一二彼等少年を攜へ、其生くるを見て、甚慰めたり。一三我等舟に乗り、先だちてアツソンに往けり、彼處に於てパウエルを接けん爲なり、蓋彼自ら歩行せんと欲して、斯く我等に命じたり。一四彼アツソンに於て我等に會ひたれば、我等彼を接けて、ミテイリナに來れり。一五彼處より舟を出して、次の日ヒユスの對面に至り、又次の日サモスに着き、トロギリヤに泊りて、明日ミリトに至れり。一六蓋パウエルは舟行して、エフエスを過ぎんと定めたり、アシヤに久しく留らざらん爲なり、彼能くすべくば、五旬節の日にイエルサリムに在らんと欲したればなり。一七彼はミリトよりエフエスに人を遣して、教會の長老等を召したり。一八彼等が來りし時、之に謂へり、爾等は我がアシヤに來りし初の日より、恒に爾等と偕にせし事の如何を知れり、一九我は謙遜を竭し、多くの涙を流して、イウデヤ人の惡謀に由りて我に及びし艱難の中に、主に事へ、二〇凡そ益ある所は一も漏さずして、爾等に宣べ、衆人の前にも我家にも教へて、二一イウデヤ人及びエリリン人に、神の前に悔改して、我が主イエススハリストスを信ずべきを勧めたり。二三今視よ、我神に縛られて、イエルサリムに往

く、彼に於て若何なる事に遇はんを知らず。二三 惟聖神邑毎に證して、縲紲と患難とは我を俟つと云ふ。二四 然れども我之を意と爲さず、又我が生命を貴しとせず、但願はくは忻びて、我が往く程及び主イエスより受けし職、即神の恩寵の福音を證することを盡さん。二五 今視よ、我知る、爾等我が素巡りて神の國を傳へし所の者は、皆復我が面を觀ざらん。二六 故に我今日爾等に證す、我は衆の血に與るなし、二七 蓋我は神の旨を漏さずして、悉く爾等に傳へたり。二八 故に爾等自ら慎み、又全群を慎め、乃聖神爾等を其中に立てて、監督と爲し、主神が己の血を以て獲たる教會を牧せしむ。二九 蓋我知る、我が去りし後、殘忍なる狼、群を惜まざる者は、爾等の中に入らん、三〇 爾等の中より人人起りて、門徒を誘ひ、己に従はしめん爲に、理に悖る事を語らん。三一 故に徹醒して、我が三年間晝夜斷えず、涙を以て爾等各人を誨へしを憶へ。三二 兄弟よ、今我爾等を神及び其恩寵の言、爾等を建て、爾等に凡の聖せられし者の中に嗣業を與ふるを能くする者に託す。三三人の金銀の衣服は、我未だ之を貪らざりき。三四 爾等自ら知る、此の我が手は我及び我と偕に在りし者の需に供せしを。三五 凡の事に於て我爾等に斯く勞して、柔弱者を扶け、且主イエスの言を憶ふ可きを示せり、蓋彼自ら云へり、與ふるは受くるよりも更に福なりと。三六 言ひ竟りて、彼膝を屈めて、衆と偕に禱れり。三七

彼等皆大に哭き、パウエルの頸に俯して、彼に接吻し、三八 其復我が面を觀ざらんと言ひし言に因りて、殊に憂ひたり。遂に彼を舟に送れり。

第二十一章 一 我等は彼等に別れて、舟行して、徑にコスに至り、次の日ロドスに至り、彼よりパタラに適き、ニフィニキヤに濟るべき舟に遇ひて、之に登りて行けり。三 キプルを望み見て、之を左に遺し、シリヤに航り、テイルに着けり、蓋舟は彼に於て載を卸すべかりしなり。四 我等門徒に遇ひて、此に居りしこと七日。彼等神に因りて、パウエルにイエルサリムに上る勿らんことを言へり。五 七日を超えて、我等出でて往き、彼等其妻子と偕に我等を送りて、邑の外に至り、岸に在りて我等皆膝を屈めて禱れり。六 互に別を告げて後、我等は舟に登り、彼等は家に歸れり。七 我等テイルよりプロトレマイダに航りて、舟行を終へたり、彼處に兄弟に安を問ひて、一日與に居りき。八 次の日パウエル及び我等彼と偕にせし者は出でて、ケサリヤに來り、福音者フィリップ、即 七人の役事の一の家に入りて、共に留れり。九 彼に四人の女あり、處女にして、預言する者なり。一〇 我等が多くの日彼處に居る時、イウデヤより一の預言者、アガフと名づくる者下り、二 我等に來りて、パウエルの帶を取り、己の手足を縛りて日へり、聖神斯く云ふ、イウデヤ人はイエルサリムに於て此の帶

の主を此くの如く縛りて、異邦人の手に付さんと。一二之を聞き、我等も此の地の者も彼にイエルサリムに上らざらんことを勧めたり。二三然れどもパウエル答へて曰へり、爾等胡爲れぞ哭きて、我が心を摧く、蓋我主イエスの名の爲には、第に縛らるるのみならず、イエルサリムに死するも、亦甘ざる所なり。一四彼が我等の勸を受けざるを見て、止みて曰へり、主の旨成るべし。一五此の日の後、我等旅装して、イエルサリムに上れり。一六ケサリヤの門徒數人亦我等と偕に往きて、我等を一の舊き門徒、キプルの人ムナソンの許に送り、我等を其家に寓らしめん爲なり。一七我等がイエルサリムに至りし時、兄弟欣びて我等を接けたり。一八次の日、パウエル我等と偕にイアコフに詣り、長老も皆來れり。一九パウエル彼等の安を問ひて、一一神が彼の職を以て、異邦民の中に行ひし事を述べたり。二〇彼等此を聞いて、神を讚榮し、又彼に謂へり、兄弟よ、爾は信ぜしイウデヤ人の幾萬なるを見る、皆律法に熱心なる者なり。二一而して彼等は爾の事に付きて、爾は異邦の中に居る悉くのイウデヤ人に、モイセイに背くを教へて、其子に割禮を行ふ可からず、先祖の例に従ふ可からざることを言ふと聞けり。二三然らば若何せん、蓋民は爾の來りしを聞いて、必集らん。二三我等が爾に言ふ所を爲せ、我等に誓願の者四人あり、二四爾彼等を攜へて、之と偕に潔まれ、代りて其費を贖ひ、彼等に髪を薙るを得しめよ、然らば

皆爾に付きて聞きし事の虚しくして、爾自も仍律法を守るを知らん。二五信ぜし異邦人に至りては、我等己に書を遺りて、彼等が此くの若き事を守らず、惟偶像に獻げし物と、血と、勒死したる物と、淫行とを戒む可きを定めたり。二六是に於てパウエル彼の人人を攜へ、次の日彼等と偕に潔まりて、殿に入り、潔の日の盡期、即彼等各人の爲に獻物を獻ずべき時を告げたり。二七七日の竟らんとする時、アシヤより來りしイウデヤ人、彼が殿に在るを見て、衆民を騒がし、手を彼に措きて二八呼べり、イスライリ人よ、助けよ、此の人は四方に衆人に、斯の民と律法と此の所に敵するを教ふ、且エリン人を引きて殿に入れ、此の聖なる所を汚せり。二九蓋彼等は前にエフェス人トロフイムが彼と偕に城に在るを見て、パウエル彼を殿に引き入れたりと意へり。三〇是に於て城擧りて騒ち民は趨せ集り、パウエルを執へて、殿の外に曳き出せり、其門直に閉ざされたり。三一彼等が之を殺さんと謀れる時、イエルサリムに擧りて亂れたりとの報、隊の千夫長に至りたれば、三二彼直に兵卒と百夫長とを率ゐ、趨せて彼等に就き、彼等は千夫長と兵卒とを見て、パウエルを撲つことを止めたり。三三千夫長近づきて、パウエルを取り、二の鐵索を以て繋がんことを命じ、其誰たる、又何事を爲ししかを問へり。三四民の中或人は此の事を號び、或人は彼の事を號べり。千夫長は騒擾に因りて、實情を知る能はずして、彼を曳きて兵營に入れんことを命

ぜり。三五 パワエル階に在りし時、民の擁るに因りて、兵卒彼を負ふに至れり。三六 蓋多くの民は隨ひて、彼を殺せと呼べり。三七 兵營に入らんとする時、パワエル千夫長に謂へり、我爾に言ふ所あり、之を言ふを得べきか。彼曰へり、爾グレチャの言を知れるか、三八 然らば爾は彼のエギペト人、是より先に亂を作し、四千人の賊を率ゐて、野に出でし者に非ずや。三五 パワエル曰へり、我はイウデヤ人、タルスの産、キリキヤの名 邑の住民なり、請ふ、我に民に向ひて言ふを許せ。四〇 彼許したれば、パワエル階に立ちて、民に向ひて手を揺かし、大に静黙するに及びて、エウレイの言を以て語りて言へり。

第二十二章 一 兄弟及び諸父よ、請ふ、我が今爾等の目に自ら訴ふる所を聴け。二 彼等其エウレイの言を以て語るを聞きて、愈靜まれり。パワエル曰へり、三 我はイウデヤ人にして、キリキヤのタルスに生れ、此の城のガマリイルの足下に養はれ、織に先祖の法律を教へられ、神の爲に熱心なること、今日の爾等衆の如く然り。四 我曾て死に至るまで、斯くの道を窘逐して、男女に論なく、縛りて獄に解せり、五 司祭長及び衆長老の我が爲に證を爲すが如し、蓋我は彼等より兄弟に遺る書を受けて、ダマスクに往けり、彼處に居る者を縛りて、イエルサリムに曳き來りて、刑を受けしめん爲なり。六 我往

きて、ダマスクに近づける時、約日中、倏天より大なる光ありて、我を環り照せり。七 我地に仆れて、我に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を窘逐する。八 我對へて曰へり、主よ、爾は誰たる。彼我に謂へり、我は爾が窘逐するイイススナゾレイなり。九 我と偕に在りし者は、光を見て懼れたり、然れども我に語る聲を聞かざりき。一〇 我曰へり、主よ、我に何を爲すべきか。主は我に謂へり、起ちてダマスクに往け、彼に於て、凡そ爾が行はん爲に定められし事を、爾に告げられん。一一 其光の輝に縁りて、我見るを得ざりし故に、我と偕に在りし者に手を援かれて、ダマスクに至れり。一二 アナニヤと名づくる者、律法に循ひて敬虔なる人にして、凡そダマスクに居るイウデヤ人に稱せらるる者は、一三 我に來り、旁に立ちて、我に謂へり、兄弟サウルよ、見るを得よ、我即時に彼を仰ぎ見たり。一四 彼我に謂へり、我が先祖の神は、爾が其旨を知り、義者を見、其口より聲を聞かん爲に、預め爾を選べり。一五 蓋爾は見し所聞きし所を、彼の爲に、衆人の前に證する者と爲らん。一六 今何ぞ援うする、起ちて、主イイススの名を籲びて、洗を受け、爾の罪を滌へ。一七 我イエルサリムに反りて、殿に禱る時、神象外に遊びて、一八 我は主の我に謂ふを見たり、云く、急ぎて、速にイエルサリムより出でよ、蓋此には爾が我の爲にする證を納れざらん。一九 我曰へり、主よ、彼等知る、我嘗て爾を信する者を獄に入れ、

且諸會堂に扑ち、二〇又爾の證者ステファンの血の流されし時、我彼處に立ちて、之を殺すを可とし、此を殺す者の衣を守りしを。二一主は我に謂へり、往け、我爾を遠く異邦民に遣さん。二三彼等聽きて、此の言に至れり、是に於て聲を揚げて曰へり、此くの如き者を地より去れ、彼生く可からざればなり。二四彼等號び、衣を擲ち、塵を空中に揚ぐる時、二五千夫長はパウエルを曳きて、兵營に入るを命じ、鞭ちて之を訊すべしと言へり、何の故に彼に向ひて、斯く號べるを知らん爲なり。二六革帶を以てパウエルを繋ぎし時、彼傍に立てる百夫長に謂へり、ロマの人、且其罪を定めずして、鞭つは可なるか。二七百夫長此を聞きて、往きて、千夫長に告げて曰へり、爾の爲さんとする所を慎め、蓋此の人はロマ人なり。二七千夫長就きて、彼に謂へり、我に告げよ、爾はロマ人なるか。彼曰へり、然り。二八千夫長答へて曰へり、我多くの金を以て此の民籍を得たり。パウエル曰へり、我は生ながらにして然り。二九是に於て彼を訊さんとする者直に退けり。千夫長は其ロマ人たるを知りて、彼を縛りしことを懼れたり。三〇明日、イウデヤ人が彼を訴ふる故を確に知らんと欲して、其縛を解き、司祭諸長と全公會とに集らんことを命じ、パウエルを攜へ出でて、彼等の前に立たしめたり。

第二十三章 一パウエル公會に目を注ぎて曰へり、兄弟よ、我良心を盡し、神の前に生を度りて、今日に至れり。二司祭長アナニヤは側を立てる者に命じて、其口を撃たしめたり。三其時パウエル彼に謂へり、粉聖の壁よ、神は爾を撃たん、爾は法に依りて我を審かん爲に坐するに、法に違ひて我を撃つを命ず。四側を立てる者曰へり、爾神の司祭長を誦するか。五パウエル曰へり、兄弟よ、我其司祭長たるを知らざりき、蓋録せるあり、爾の民の有司を誦る勿れと。六パウエル其半はサッドウケイ等、半はファリセイ等なるを知りて、會中と呼びて曰へり、兄弟よ、我はファリセイにして、ファリセイの子なり、死者の復活を望むに因りて、我今審を受く。七彼が此を言ひし後、サッドウケイ等とファリセイ等との間に争起りて、會衆相分れたり。八蓋サッドウケイ等は復活なく、天使も神もなしと言ひ、ファリセイ等は皆之れ有りと認む。九遂に大なる號起れり、ファリセイの黨學士等起ちて、争ひて曰へり、我等此の人に一も惡あるを見ず。若し神或は天使の彼に言ひしことあらば、我等神に敵す可からざるなり。一〇争益劇しきに因りて、千夫長はパウエルが彼等に裂かれんことを恐れて、兵卒に命じて、下りて彼を其中より奪ひ、兵營に引き入らしめたり。一一次の夜、主は彼に現れて曰へり、パウエルよ、勇め、蓋爾我の事をイエルサリムに證せし如く、是くの如くロマに證すべし。一二旦に及びて、或イウデヤ人黨

を結び、共に誓ひて、パウエルを殺すに至るまで食はず飲まずと曰へり。二三 此の誓を爲しし者は四十人餘なり。二四 彼等は司祭諸長及び長老等に就きて曰へり、我等はパウエルを殺すに至るまで何を食はずと誓を發せり。一五 故に爾等今、公會と與に彼の事を尚詳に訊さんと欲する状を爲して、千夫長に告げて、明日彼を爾等の前に引き下らしめよ、我等は其未だ近づかざる前に、彼を殺すを爲せり。一六 パウエルの姉妹の子此の陰謀を聞きて、來り、兵營に入りて、パウエルに告げたり。一七 パウエル一の百夫長を呼びて曰へり、此の少者を千夫長に攜へ往け、此の者彼に告ぐべき事あればなり。一八 彼は之を攜へて、千夫長に至りて曰へり、囚者パウエル我を呼びて、此の少者を爾に攜へ往かんことを請へり、彼爾に言ふべき事あり。一九 千夫長其手を援きて、僻處に退きて問へり、爾は我に何の告ぐる所あるか。二〇 彼曰へり、イウデヤ人は尚詳にパウエルの事を問はんと欲する状を爲して、爾に明日彼を公會の前に引き下さんことを請はんと相約せり。二二 爾彼等に從ふ勿れ、蓋し其中の四十人餘は、陰に彼を謀りて、彼を殺すに至るまで食はず飲まずと誓へり、今彼等備へを爲して、爾の許を俟つ。二三 千夫長は少者を戒めて、爾斯の事を我に告げたりと、何人にも語る勿れと言ひて、之を去らしめたり。二三 乃百夫長二人を召して曰へり、兵卒二百人、騎兵七十人、戟を持つ者二百人を備へよ、今夜第三時

よりケサリヤに往かん爲なり。二四 又畜を備へよ、パウエルを乗せて、方伯フェリクスに送らん爲なり。二五 且書を致せり、左の如し、二六 クラウディイリシヤは尊憲なる方伯フェリクスの安を問ふ。二七 此の人イウデヤ人に執はれ、將に殺されんとせしを、我其羅馬人たるを知りて、兵卒を率ゐ、趨きて之を拯ひたり。二八 彼等が之を訴ふる故を知らんと欲して、之を引き、其公會に至りしに、二九 彼が訴へらるるは、惟彼等の律法の論究に因るのみにして、一も死或は縲綆に當る罪あるを見ざりき。三〇 然れどもイウデヤ人が此の人を害せんと謀ることの、我に示されしに因りて我直に彼を爾に送り、訴ふる者にも爾の前に彼を訴へんことを命じたり。願はくは平安なれ。三一 是に於て兵卒は命に遵ひ、パウエルを取りて、夜アンテイパトリダに引き至れり。三二 明日、騎兵をして之を送らしめ、其餘は兵營に歸れり。三三 騎兵はケサリヤに來り、書を方伯に呈して、パウエルを其前に立てたり。三四 方伯書を讀み竟りて、彼が何の縣に屬するかを問ひ、其キリキヤの人たるを知りて三五 曰へり、爾を訴ふる者來らん時、我爾に聽かん。乃命じて、彼をイロドの公廨に守らしめたり。

第二十四章 一五日の後、司祭長アナニヤは長老等及び一の辯士テルトゥルと與に下りて、パウエルを方伯に訴へたり。二 パウエル

が召されし時、テルトゥル訴へて曰へり、三 尊憲なるフェリクスよ、我等が爾に由りて太平を獲、且此の民が爾の賢慮に藉りて善く治めらるることは、我等時に隨ひ、感謝に堪へずして、之を承け認む。四 然れども我多く爾を煩はさずして、爾の寛宥を以て我等の片言を聽かんを求む。五 我等は此の人を見て、疫病の如き者、天下に居る悉くのイウデヤ人の中に亂を作す者、ナザレトの異端の首たる者、六 殿を汚すことをも試みし者と爲して、彼を執へ、我が律法に依りて審かんと欲せり。七 然れども千夫長リシヤ來りて、甚しく強ひて、彼を我等の手より奪ひて、爾に遣し、八 我等彼を訴ふる者にも爾に往くを命ぜり。爾自ら彼を訊さば、我等が彼を訴ふる諸端を知るを得ん。九 イウデヤ人も之を確めて、此等の事誠に然りと云へり。一〇 方伯首を以て示して、パウエルに言はしめられたれば、彼答へて曰へり、我爾が多年此の民に公義の審判者たるを知れるが故に、更に喜びて我が事情を辯ぜん。二 爾知るを得べし、我禮拜の爲にイエルサリムに上りしより、十二日を踰えず、二三 而して彼等は我が殿に於ても、會堂に於ても、城に於ても、人と爭論し、或は民を亂すを見ざりき。二三 亦今我を訴ふる事を確證するを得ず。一四 我惟此の事を爾の前に承け認む、即 我は彼等が異端と名づくる道に循ひて、我が先祖の神に事へ、凡そ律法と諸預言者とに録されし事を信じ、一五 神に頼りて、義及び不義なる死者の復活のあらんこと

を望む、彼等も亦望む所の如し。一六 故に我自らも勵みて、恒に神の前及び人の前に責めなき良心を保たんことを勉む。一七 多年を歴て後、我は施濟を我が民に爲し、又禮物を獻ぜん爲に來れり。一八 之を行ふ際、我已に潔まりて、民と偕に在らず、騷擾の中に在らざる者を、殿に見たる人あり。一九 此れ即 アシヤより來りし數イウデヤ人なり、彼等若し我に對して言ふべきことあらば、今爾の前に在りて、我を訴ふべかりしなり。二〇 抑茲に在る者は、我が公會の前に立てる時、我に何の不義あるを見しか、之を言ふべし。二一 或は此の一言か、即 我は彼等の中に立ちて、呼びて、我死者の復活の爲に今日爾等より審を受くと、曰ひしことなり。二二 フェリクス聞き竟りて、更に 詳に斯の道を知りて、彼等の事を延ばして曰へり、千夫長リシヤの來らん時、我爾等の訴へを定めん。二三 是に於て百夫長に命じて、パウエルを守らしめ、而して之を緩やかにし、其近親の何人にも彼に事へ、或は彼に來るを禁ぜざらしめたり。二四 數日の後、フェリクスは其妻イウデヤの女ドルジラと與に來り、パウエルを召して、其ハリストス イイヌスを信ずる道を講ずるを聽けり。二五 彼公義と節制と將來の審判とを講ずるに、フェリクス漸く懼れて、答へて曰へり、今退け、我暇を得ば、爾を召さん。二六 且彼はパウエルが釋を得ん爲に彼に金を與へんことを望めり、故に屢之を召して共に語れり。二七 然れども二年を超えて、ポルチイフェ

ストはフェリクスに代りて、其職を承けたり。フェリクス悦をイウデヤ人に得んと欲して、パウエルを遣して、仍其繫を釋かざりき。

第二十五章 一 フェストは任地に蒞みて三日の後、ケサリヤよりイエ

ルサリムに上れり。二時に司祭長とイウデヤの尊者とはパウエルを彼に訴へ、且彼に勸めて、三恩を賜ひて、之をイエルサリムに召し出さんことを求めたり、竊に之を途に殺さんと謀れるなり。四然れどもフェスト答へて曰へり、パウエルは護られてケサリヤに在り、我も速に彼處に赴かん。五故に爾等の中の有能なる者、我と偕に下りて、若し此の人に何の不義かあらば、之を訴ふべし。六彼等の中に居ること十日を過ぎずして、ケサリヤに下り、明日審判座に坐し、命じて、パウエルを引き至らしめたり。七既に至れば、イエルサリムより下りしイウデヤ人環り立ちて、多くの重き罪をパウエルに負はしめられたるも、其證を擧ぐる能はざりき。八彼辯じて曰へり、我はイウデヤの律法、或は殿、或はケサリに對して、一も罪を犯しし事なし。九フェストはイウデヤ人の悦を得んと欲して、パウエルに答へて曰へり、爾イエルサリムに上りて、彼處に此の事に付きて、我より審判を受けんことを望むか。一〇パウエル曰へり、我はケサリの審判の堂に立つ、我此の處に於て審判を受くるは當然なり。我一もイウデヤ人に不義を爲ししことなし、爾も善く知る所の如し。一一蓋若し我

不義を爲して、死に當たる事を犯ししならば、我死を辭せず、然れども若し彼等が我を訴ふる所一も我に有らざれば、誰も我を彼等に付す能はず。我ケサリに上告す。一二其時フェストは議官と相議りて、答へて曰へり、爾ケサリに上告すと言へり、然らばケサリに往かん。

一三數日を超えて、アグリッパ王及びワエレニカはケサリヤに來りて、フェストの安を問へり。一四彼處に居ること日久しきに因りて、フェストはパウエルの事を王に告げて曰へり、此にフェリクスの遺し一人の囚あり、一五我イエルサリムに在りし時、司祭諸長とイウデヤの長老等と之を訴へて、罪に定めんことを請へり。一六我彼等に答へて曰へり、訴へらるる者が己を訴ふる者の面前に於て、其訴ふる所を辯解すべき機を未だ得ざる先に、之を死に付すは、羅馬人の例に非ず。一七故に彼等が此に來りし時、我暫くも延ばさずして、次の日審判座に坐し、命じて、其人を引き至らしめたり。一八訴ふる者彼を環り立ちて、一も我が逆め料りし罪を擧げざりき。一九彼等唯己の宗教の事、及び死せし一人のイエス、パウエルが其生くと云ふ者の事に付きて爭論せり。二〇我此くの若き疑問を決するに惑ひて、彼にイエルサリムに往きて、彼處に此の事の爲に審判を受けんことを望むかと曰へり、二一然れどもパウエルは、留められて、アウグストの審問を俟たんと欲せしに因りて、我彼をケサリに遣すに至るまで護らんことを命ぜり。二二アグリッパはフェストに謂へり、

我も此の人に聽かんことを望む。彼曰へり、明日爾彼に聽かん。二
三 明日アグリツパ及びウェレニカが大に威儀を設けて來り、諸千
夫長と邑の尊者と偕に審判堂に入りし時、フェストの命に因りて、
パウエルを引き出されたり。二四 フェスト曰へり、アグリツパ王及び
凡そ我等と共に在る人よ、爾等が見る所の者は、即イウデヤ人の
大衆がイエルサリムにも此處にも我に訴へて、彼は是より生くべか
らずと、呼びし者なり。二五 然れども我之を糾して、其一も死に當る事
を爲さざりしを知れり、而して彼自らアウグストに上告すと言ひ
しに因りて、彼を送らんことを定めたり。二六 我は彼に就きて君主に
上書すべき實情を得ず、故に彼を爾等特に爾アグリツパ王の前に
引き出せり、豫審の後に、我が上書すべき事を得ん爲なり。二七 蓋我
は囚人を送りて、其罪案を具へざるを、理に合はずと意へり。

第二十六章 一 アグリツパはパウエルに謂へり、爾に己の爲に陳ぶ
るを許されたり。是に於て、パウエル手を伸べて、辯じて曰へり、二
アグリツパ王よ、我がイウデヤ人に訴へられし事を、今日悉く爾
の前に辯解するを得るは、我幸なりとす、三 殊に幸なるは、爾
がイウデヤ人の悉くの例と争論の諸端とを知るに因る。故に爾に
求む、寛に我を聽かんことを。四 始めて我が民の中にイエルサリム
に送りたる我が生命は、我が幼より、イウデヤ人皆之を知る、五

彼等若し證を作さんと欲せば、素より我が嘗て我等の宗教の中に
尤厳しき派に循ひ、フアリセイとして生を度りしを知る。六 今も
我が立ちて審判をうくるは、神より我が先祖に賜ひし許約の爲
なり、七 是れ我が十二支派が日夜熱心に奉事して、成就するを見ん
と望む所なり。アグリツパ王よ、此の望の爲に我イウデヤ人に訴
へられたり。八 何ぞや、神が死者を復活せしむるを爾等信じ難しと
するか。九 我も曾て多方を以てイエスナゾレイの名に敵すべしと
意へり。一〇 イエルサリムに於て我果して是を行へり、司祭諸長よ
り權を受けて、我多くの聖徒を獄に閉ざし、彼等の殺さるる時、我之
を應諾し、一一 諸會堂に於て屢彼等を苦めて、強ひてイエスを
毀らしめ、彼等に敵して甚しく狂ひ、外邑にまで彼等を窘逐せり。
一二 是が爲に司祭諸長より權と委任とを受けて、ダマスクに往く時、
一三 王よ、我正午途中に於て、天より光あるを見たり、日の光よ
りも耀きて、我及び共に行く者を環り照せり。一四 我等皆地に仆れ、
我はエウレイの言を以て我に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウ
ル、何ぞ我を窘逐する、爾荊を踏むは固し。一五 我曰へり、主よ、爾
は誰たる。彼曰へり、我は爾が窘逐するイエスなり。一六 然れど
も起きて、爾の足にて立て、蓋我が特に爾に現れしは、爾を立て
て、役者と爲し、爾が見し事及び我が爾に示さんとする事の證者
と爲さん爲なり、一七 我爾をイウデヤ民及び異邦人より拯はん。今

爾を彼等に遣して、一八 其目を啓かしむ、彼等が暗より光に轉じ、サタナの權より神に歸し、我を信するに因りて、罪の赦、及び聖せられし者と偕に業を獲ん爲なりと。一九 故にアグリッパ王よ、我天の顯現に逆らはざりき。二〇 乃先づダマスク及びイエルサリムの人に、次ぎてイウデヤの全地及び諸異邦人に、彼等が悔改し、且神に歸して、悔改に合ふ行を爲すべき事を傳へたり。二二 此が爲にイウデヤ人我を殿に執へて、裂き殺さんと欲せり。二三 然れども我は神より佑を蒙りて、今日に至るまで立ちて、小き者にも大なる者にも證を作し、諸預言者及びモイセイが必成らんと言ひし事の外に、一も言ふ所なし、二三 卽ハリストスは苦を受け、死者の復活の始と爲りて、此の民及び異邦人に光を傳ふべかりしことは是なり。二四 彼が斯く辯ずる時、フェスト大なる聲を以て言へり、パウエルよ、爾は狂へり、博學は爾を狂はしむ。二五 彼曰へり、尊憲なるフェストよ、我は狂へるに非ず、乃眞實にして正慧なる言を陳ぶるなり。二六 我が毅然として語るを聞く王は、此等の事を知る。蓋我は此等の一も彼に隠されしを信ぜず、此れ僻隅に行はれし事に非ざればなり。二七 アグリッパ王よ、爾は諸預言者を信するか、我爾が信するを知る。二八 アグリッパはパウエルに謂へり、爾我を勧めて「ハリステイアニン」たらしめざること少しのみ。二九 パウエル曰へり、神に禱らくは、少しくも多くも爾のみならず、乃凡そ今日我に聽く者

は、此の械繫の外、我に同じき者と爲らん。三〇 彼が此を言ひて後、王と方伯とワエレニカ及び共に坐する者は起ち、三一 退きて、相語りて曰へり、此の人は一も死或いは械繫に當る事を行はず。三二 アグリッパはフェストに謂へり、此の人若しケサリに上告すと言はざりしならば、釋さるべき者なり。是を以て方伯は彼をケサリに送らんとを定めたり。

第二十七章 一 我等已にイタリヤに航らんことを定められたれば、パウエル及び他の或囚者等を、アウグストの隊の百夫長ユリイと名づくる者に付せり。二 我等はアシヤの諸所を経んとするアドラミトの舟に登りて行けり。マケドニヤのフェサロニカの人アリストアルフ我等と偕にせり。三次の日シドンに着けり。ユリイは善くパウエルを侍ひて、彼に親友に往きて、其愛顧を受くるを許せり。四 既に彼處を發し、風の逆ふに因りて、キプルに沿ひて過ぎ、五 キリキヤ及びパムフィリヤに對へる海を渡りて、リキヤのミラに至れり。六 彼處に在りて、百夫長はイタリヤに往くアレキサンドリヤの舟に遇ひて、我等を之に乗せたり。七 多日の間舟の行くこと遅く、僅にクニドの對面に至り、風の逆ひて、我等を阻むに因りて、クリトの下を行きて、サルモンを経、八 僅に之を過ぎて、佳湊と名づくる處に至れり、其近傍にラセヤの邑あり。九 時を歴ること久しく、齋の期も過ぎたれば、

航海已に危険なるに因りて、パウエル彼等を諫めて一〇曰へり、人人よ、我觀るに、航海は困難にして、損害多からん、第載貨と舟とのみならず、我等の生命にも及ばん。一 然れども百夫長は舵師と舟長とを信ぜしこと、パウエルの言ふ所に過ぎたり。二 此の湊は冬を過ぎすに便ならざれば、多くの者は彼處を離れて、或は能すべくば、フイニカに至りて、彼處に冬を過ぎんことを勧めたり、是れクリトの湊にして、西南と西北との風を避くる處なり。三 南風徐に吹きたれば、彼等志を得たりと意ひ、錨を擧げて、クリトに傍ひて行けり。一四 然るに幾ならずして、「エウロクリドン」と名づくる狂風驟に起りて、之に逆へり。一五 舟は風に勝へずして、撃き去られ、我等其蕩ふに任せたり。一六 クラウダと名づくる小島の下に駛せて、我等僅に小艇を収むるを得たり。一七 之を擧げて後、多方を以て舟を護りて、之を縛り、且淺瀬に乗り上げんことを恐れて、帆を下して蕩へり。一八 風の甚狂へるに因りて、次の日載貨を棄て、一九 第三日に及びて、我等手づから舟具を擲てり。二〇 多日の間日も星も現れず、烈しき風息まざるに因りて、我等の救はるる望竟に絶えたり。二 彼等久しく食はざるに因りて、パウエル其中に立ちて曰へり、人人よ、爾等曾て我に聽きて、クリトを離れずして、此の困難と損害とを免るべかりしなり。二三 今も我爾等に心を安んずるを勸む、蓋爾等の中一人も生命を失はず、惟舟を失はん。二三 蓋我

が屬する所、我が奉事する所の神の使は、是の夜我に現れて二四 曰へり、パウエルよ、懼るる勿れ、爾ケサリの前に立つべし、視よ、神は爾と偕に航海する者を悉く爾に賜へりと。二五 故に人人よ、心を安んぜよ、蓋我神を信ず、其我に語りし如く、斯く成らん。二六 我等必一の島に擲たるべし。二七 第十四夜に至りて、我等アドリヤの海に飄はざる時、約夜半に、船人は或岸に近づくと意へり。二八 深を測りて、二十匁を得たり、少しく進みて、又測りたれば、十五匁を得たり。二九 石のある處に擲たれんことを恐れて、舟尾より四の錨を投して、天の明くるを俟てり。三〇 舟人は舟より逃れんと欲し、錨を船首より投さんとする狀を爲して、小艇を海に下ぐる時、三一 パウエルは百夫長と兵卒とに謂へり、此の人人舟に留らざれば爾等救はるる能はず。三二 兵卒即小舟の索を斷ちて、其墜つるに任せたり。三三 天明けんとする時、パウエル衆人に糧を取らんことを勸めて曰へり、爾等食はずして、飢ゑて俟つこと今已に十四日なり。三四 故に我爾等に糧を取らんことを勸む、是れ爾等の救の助と爲らん、蓋爾等の一人にも、髪一縷だに首より墮ちざらん。三五 言ひ竟りて、餅を取りて、衆人の前に神に感謝し、擘きて先づ食へり。三六 是に於て衆人心を安んじて、亦糧を取れり。三七 我等舟に在りし者は、共に二百七十六人なりき。三八 既に食ひて飽き、麥を海に棄てて、舟を軽くせり。三九 天明けて、其地を識らざりき、然

れども一の海灣の登るべき岸あるを見て、能くすべくば、彼處に舟を着けんと謀れり。四〇 乃 錨を擧げ、舵の纜を鬆べ、小き帆を揚げ、風に順ひ、岸を望みて進めり。四一 二水の交り流るる處に至りて、舟を洲に乗り上げ、舟首は膠く着きて動かず、舟尾は浪の勁きに因りて破れたり。四二 兵卒は囚人を殺さんと謀れり、其 ぎて逃る者なからん爲なり。四三 然れども 百夫長はパウエルを救はんと欲して、其謀る所を阻み、能く ぐ者に、先づ水に投じて岸に登り、四四 其餘の者に、或は板に乗り、或は他物に藉らんことを命じたり、是くの如く皆救はれて岸に登れり。

第二十八章 一 パウエルと偕に有りし者は既に舟より救はれて、島のメリトと名づくるを知れり。二 土人は少からざる恵を以て我等を待へり、蓋雨ふり、且寒きに因りて、彼等火を熱きて、我等衆人を納れたり。三 パウエルが多く柴を集めて、火に置きし時、蝮熱の爲に出でて、其手に繞へり。四 土人は蛇の其手に懸かるを見て、相語りて曰へり、此の人は 必殺人者ならん、海より救はれたれども、義は其生くるを容さず。五 然れども彼は蛇を火に拂ひて、毫も害を受けざりき。六 彼等は其腫れんか、或は 忽仆れて死なんかと俟ちたりしに、久しく俟ちたれども、彼に毫も害の及ばざるを見て、意を轉じて、彼は神なりと謂へり。七 此の處の近く、島の長プブリーと名

づくる者の田地あり、彼等は我等を接けて、三日間慰勸に待へり。ハプブリーの父熱と痢病とを患ひて臥したるに、パウエル彼に入りて、禱りて、手を上上に按せて、彼を愈せり。九 是の事のありし後、島の中の他の病者も來りて、醫さるるを得たり、一〇 乃 禮を優にして、我等を敬ひ、別るるに臨みて、需むる所の者を贈れり。一一 三月の後、我等は此の島に冬を過ごしし「デイヲスクリ」と號する、アレキサンドリヤの舟に乗りて發せり。一二 シラクジに着きて、三日間止り、一三 彼處より繞り行きて、リギヤに至り、一日を超えて、南風起りたれば、次の日プテリに至り、一四 此に兄弟に遇ひ、其請に任せ、七日間彼等と偕に居り、遂にロマに往けり。一五 彼處の兄弟は我等の事を聞きて、アツピイの市及び三の旅館まで出でて、我等を迎へたり。パウエル彼等を見、神に感謝して、心勇みたり。一六 ロマに來りし時、百夫長は囚人等を將軍に交せり、然れどもパウエルは、之を守る一の兵卒と偕に、別に居るを許されたり。一七 三日を超えて、パウエルはイウデヤの諸長者を招けり、彼等の集りし時、之に謂へり、兄弟よ、我一も民或は先祖の例に悖る事を爲さざりしに、イエルサリムより囚となりて、ロマ人の手に付されたり。一八 彼等我を審べて、一も死罪なきが故に、我を釋さんと欲せり。一九 惟イウデヤ人が之を拒みしに因りて、我已むを得ずして、ケサリに上告す、然れども我が民を訴へん爲に非ず。二〇 是の故に我爾等を見、爾等と語

らんことを請へり、蓋我はイスライリの望の爲に此の鐵索に繋がりたり。二 彼等之に謂へり、我等は爾の事に於てイウデヤより書を受くることもなく、又來れる兄弟の中に、爾の事を告げ、或は何の悪しき事を語る者なかりき。三 然れども我等は爾が意ふ所の若何を聞かんと欲す、蓋我等は何處に於ても此の宗派に就きて爭論あるを知る。三三 乃日を定めて、多數の人彼に旅館に來れり、彼は朝より暮に至るまで、彼等に神の國の教を宣べ、モイセイの律法及び諸預言者より證を引きて、彼等にイイススを信するを勧めたり。三四 或者は其言ふ所を信じ、或者は信ぜざりき。三五 互に相合はずして散ずる時、パウエル一言を發して曰へり、聖神が預言者イサイヤを以て、我が先祖に言ひし事は誠に善し、二六 云く、斯の民に往きて曰へ、爾等耳にて聽けども、悟らず、目にて視れども、見ざらん。二七 蓋此の民の心は頑になれり、耳は聽くに慵く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて視、耳にて聞き、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。二八 故に爾等知るべし、神の救は異邦人に遣されたり、彼等は則聽かん。二九 彼が之を言ひし後、イウデヤ人多く相論じて歸れり。三〇 パウエルは滿二年自ら借りたる家に居り、凡そ彼に來る者を受け、三一 毅然として、妨げなく、神の國を傳へ、主イイススハリストスの事を教へたり。